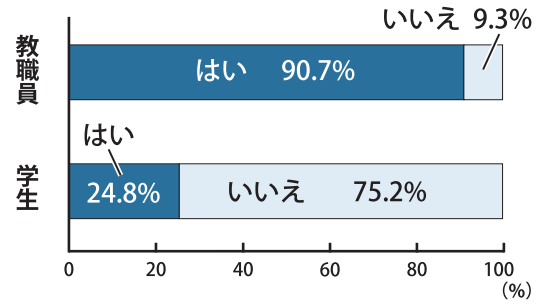
学生7割「知らない」

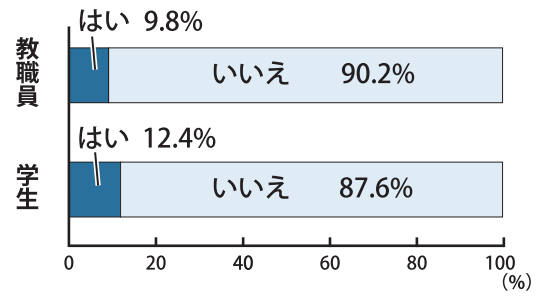
本紙調査　筑波大のセクハラ防止の取り組み

世界的にセクシュアル・ハラスメント（セクハラ）＝🔑＝が問題となる中、本紙は昨年12月、セクハラに関する学内アンケートを行い、回答した教職員194人、筑波大学生145人のうち教職員19人（9・8％）、学生18人（12・4％）が所属する研究室・ゼミで「何らかのセクハラを受けたことがある」と答えた。「セクハラを受けた」人のうち、学内の相談機関の利用は4人だけだった。また、学生109人（75・2％）が筑波大のセクハラ防止の取り組みを「知らない」と答えてもいる。筑波大では昨年2月、教員がセクハラで懲戒解雇されている。（本紙取材班、6、7面に関連特集）

筑波大のセクハラ防止の取組みを知っているか



何らかのセクハラを受けたことがあるか



アンケートは、連絡先が把握できた研究室・ゼミに所属する教職員1343人と、筑波大生約1100人にメールなどで配布。教職員、学生とも約15％から回答があった。教職員の回答者の内訳は、男性148人（76・3％）、女性32人（16・5％）、その他・無回答が14人（7・2％）。学生は男性62人（42・8％）、女性80人（55・2％）、その他・無回答3人（2・1％）だった。

その結果、何らかのセクハラを「受けたことがある」との回答は、教職員は女性11人、男性2人で、その他・無回答は6人だった。また学生で「受けたことがある」は、女性12人、男性3人で、その他・無回答は3人だった。

何らかのセクハラを「受けたことがある」と回答した教職員にその内容を複数回答で問うと、容姿を話題にされたり、性的な話題を聞かされるなどの「言葉によるもの」が13人で最多。次いで、「女性は昇進しなくても良い」など「就業上の不利益」が11人、お茶くみやお酌をさせられたなど、「性的役割の強要」が8人、手や腰を触られたなど「不快な性的行為」が6人と続いた。また、性的行為の強要、または未遂などの「性的な暴力行為」も1人いた。

また、学生の場合は、「性的役割の強要」が10人で最多。「言葉によるもの」が9人、「交際の強要」、「不快な性的行為」が6人と続いた。また「性的な暴力行為」も1人いた。

一方、セクハラの相談相手については、「誰にも相談しなかった」が教職員6人、学生6人でともに最多だった。次いで教職員の場合、「同僚の教員または職員」が3人、「友人」、学内の教職員から選ばれる「大学のハラスメント相談員」が2人だった。一方、学生の場合は「友人」が4人、「上級生や先輩」が3人と続いた。

筑波大は2005年からハラスメントへの全学的な対応を開始。16年には相談室を設置し、複数の相談員に加えカウンセラー資格を持つ職員1人を配置した。学生や教職員は、相談員とカウンセラーいずれかを選んで相談できる。

🔑セクシュアル・ハラスメント（セクハラ）＝「性的言動」によって不利益を受けたり、労働環境などが害されるハラスメント（嫌がらせ）のこと。17年にハリウッド女優が有名映画プロデューサーのセクハラを告発したことをきっかけに、次々と告発が広がり、世界的な問題となった。

体育施設で盗難多発

筑波大　被害額は3年間で45万円以上

筑波大学の中央体育館や武道館などの体育施設内で財布から現金が抜き取られたり、パソコンが盗まれるなど盗難被害が多発している。学生生活課などへの取材によると現金被害額は2016年1月～昨年12月末までの3年間で、45万円以上。このため体育センターは昨年10月、武道館入り口にカードキーシステムを導入している。武道館はそれ以前、日中は施錠されておらず、誰でも入場できる状態だった。（西村大祐＝人文学類1年、森賀遼太＝社会学類2年）

同課によると、この3年間に筑波大体育施設で発生した盗難件数は報告されただけでも19件。うち昨年の11件（現金被害額8万8千円）が最多で、17年は3件（同3千円）、16年が5件（同36万円）だった。現金のほかパソコンや剣道の防具なども盗まれている。

一方、施設別での被害は、中央体育館が7件と最多で、武道館が6件、体育系サークル会館が3件、プールが2件、球技体育館が1件だった。これらのうち更衣室での被害が全体の約半数を占めたという。

同課によると、盗難の大半は被害に遭った学生が部やサークルの活動中に発生。施設内の鍵付きロッカーを未施錠のまま利用したため、財布などが盗まれた例もあった。

盗難事件の多発などを受け、体育センターは、昨年10月15日、武道館入り口を学生証や職員証をかざすことで開錠する仕組みに変更。この際、入場に使用した学生証や職員証の学籍番号、職員番号が記録されるという。同センターによると、これ以前、武道館は午前6時～午後9時の間、入り口は無施錠で、学外者の無断立ち入りが後を絶たなかったという。

同センター長の山田幸雄教授（体育系）は「カードシステムが犯罪の抑止力になることを期待している。施設利用の学生は今回の設置を機に、防犯意識を高めてほしい」と語った。


新設されたカードキーシステム（昨年12月19日、武道館で）＝西村大祐撮影

筑波大生 12年ぶり箱根

相馬「山登り」5区出走


箱根駅伝5区を力走する相馬選手（1月2日、神奈川県箱根町大平台で）＝木村誠撮影

筑波大学陸上競技部の相馬崇史選手（体専2年）が2、3日の第95回東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）に関東学生連合チーム🔑の一員として往路5区に出走した。筑波大生の箱根駅伝出場は大城将範（まさのり）選手（平成21年度リスク工学専攻修了）以来12年ぶりの快挙。関東学生連合チームは正式な順位はつかないが、相馬選手は1時間14分45秒と区間13位相当の走りを見せた。（木村誠＝人文学類2年、秋田耕平＝社会学類3年、加藤優花＝国際総合学類1年、森賀遼太）

昨年10月13日の箱根駅伝予選会で筑波大は全体で17位となり、本戦の出場を逃した。個人67位に入った相馬選手は関東学生連合チームに2年連続で選出。昨年は右アキレス腱の故障で欠場したが、今年は「山登り」と呼ばれ、全長20・8キロメートルで高低差が800メートル以上ある往路5区に出走した。

チームは4区と5区の間の小田原中継所（神奈川県小田原市）で相馬選手が繰り上げスタート🔑。上り坂が得意の相馬選手は、順位を9つ上げ、区間13位相当で走り終えた。沿道では、筑波大の旗を持ったOBらが多数応援。「序盤5キロは練習の疲労が残り、体が思うように動かなかった」と話した相馬選手は、「沿道の大きな声援が心強かった。満足いかない結果だが今の実力は出し切れた」とも語っていた。

🔑関東学生連合チーム＝箱根駅伝予選会で出場権を得られなかった大学から、個人成績が優秀な選手を選抜して構成される箱根駅伝出場チームの一つ。

🔑繰り上げスタート＝中継所で規定の時間内に前の走者が来なかった場合に次の走者を出発させること。

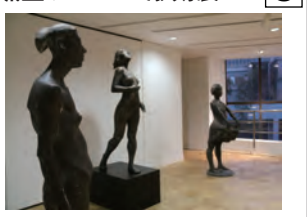
筑波おろし

「ファーストペンギン」。集団で行動するペンギンの群れの先頭に立ち、エサを求めて海へ最初に飛び込む1羽のことだ。転じて、前例のないことに挑戦する人を指す▼その代表例は、元サッカー日本代表の本田圭佑だと思う。豪州リーグで選手として活躍する傍ら、昨年8月にカンボジア代表の実質的な監督に就任。豪州とカンボジアを往復し、プレーと指導の両立に励む。現役選手でありながら代表チームを指揮するのは世界初の試みだ▼だが挑戦の道のりは険しい。監督就任から初勝利までに6戦を要した上、国際サッカー連盟（FIFA）が決める代表チームの順位「FIFAランキング」でカンボジア代表は本田の監督就任以降、166位から172位に下降した（昨年12月現在）▼それでも本田は歩みを止めない。「簡単に成功するとは思っていない」と話し、カンボジア代表の選手と1対1の面談など、綿密なコミュニケーションを図る。また、選手活動の合間を縫って代表チームの対戦相手の分析を行うなど、献身的な活動に取り組む。本田は勝利を目指し突き進む▼年が明け、筑波大学新聞の副編集長になった。今後事実を求め報道を続ける中で、挫折も生まれるだろう。それでも本田のように挑戦していきたい。本田は「挫折は成功の過程だ」と言う。自分もいつの日か「ファーストペンギン」になれるだろうか。

筑波大学新聞
第347号
編集責任
筑波大学新聞
編集委員会
TEL・FAX 029(853)6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月　刊
発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

注目記事

『いだてん』特別展開催　2
蝋型ブロンズ彫刻展　5


ブロンズ彫刻の展示

女子バレー 9年ぶり優勝　8
バスケ 男女共にベスト4　9
つくば市 プラゴミ分別収集　10
自転車盗難被害減らず　11

ミニ特集

3
退職教員4人に聞く
教員人生の軌跡

特集

6,7
セクハラ・アンケート実施
「大学に行きたくなくなった」

金栗四三を描く大河ドラマ『いだてん』

学内で特別展など開催

制作に筑波大協力

日本人初の五輪マラソン選手で筑波大学の前身・東京高等師範学校出身の金栗四三を描く2019年NHK大河ドラマ『いだてん～東京オリムピック噺～』の放映開始（6日）を受け、筑波大では金栗らの特別展を開催するなどのさまざまな活動が始まっている。またオリンピック歴史研究が専門の真田久教授（体育系）などがスポーツ史の考証を担当するなど、番組には筑波大関係者が関与してもいる。これらの活動をまとめた。（牧田宗大＝社会学類2年、木村誠）



（左）ドラマの主人公・金栗四三（右）金栗の恩師で東京高等師範学校校長の嘉納治五郎＝事業開発推進室提供

■金栗・嘉納特別展

22日から12月25日まで、筑波大体育ギャラリーや東京キャンパスなどで開催されている。体育ギャラリーで開かれている「金栗四三特別展」では金栗本人使用の足袋や直筆の書、筑波大所蔵の書籍や写真などを展示。また、筑波大体育ギャラリー前ホールで開かれている「嘉納治五郎特別展」では、嘉納の東京高等師範学校での教育活動などを展示している。開館時間は一部会場を除き、午前9時30分～午後5時で、月曜は休館。観覧料は「金栗展」のみ300円で、他は無料。

■熊本県と連携協定

筑波大は昨年12月1日、金栗の出身地・熊本県などと、スポーツを通じて地域活性化を図る連携協定を締結した。同県のほか、金栗の出生地・和水町、出身校の玉名北高等小学校（当時）があった南関町、金栗が人生の半分以上を過ごした玉名市が参加。金栗の功績を活用した観光振興や、スポーツを通した教育・文化の振興、まちづくり、健康・福祉の充実を目指す。

筑波大事業開発推進室によると今後、筑波大は同県内で開かれるスポーツをテーマとした講演会やマラソン大会などに教員や学生を派遣していくという。

■ドラマ考証など

ドラマでは真田教授と大林太朗助教（体育系）がスポーツ史考証を行うほか、身体教育学が専門の大山卞圭悟准教授（体育系）が陸上競技の指導を行っている。

■『いだてん』

日本が初参加した1912年のストックホルム五輪から、戦争で返上した40年の東京五輪などを経て、64年の東京五輪までのドラマ。主人公の金栗を中村勘九郎、東京高等師範学校校長でアジア人初の国際オリンピック委員会委員の嘉納治五郎を役所広司が演じる。金栗が嘉納の勧めでストックホルム五輪に出場する様子や、嘉納が東京五輪招致に奮闘する姿などが描かれる。

筑波大公式アプリ開発

4月以降に配信予定

筑波大学は寄付金を集めることを主な目的に、スマートフォン向け公式アプリの配信を4月以降に始める。アプリには寄付金の受付機能のほか、筑波大に関するニュースの配信機能なども備える予定だ。（田所涼＝教育学類1年、木村誠）

筑波大は2023年10月の開学50周年に合わせ、昨年6月、「創基151年筑波大学50周年記念基金」を設立し、寄付を募っている。筑波大事業開発推進室によると、同基金の目標額は10億円で、教育や研究の支援に使う予定。また、それとは別に、文化系サークル会館や体育系サークル会館などの改修や東京キャンパスに交流施設を新設するなどの施設整備に使うための寄付も集める。

アプリには寄付金受付の機能のほか、筑波大に関係したニュースの配信や、筑波大関係のウェブサイトへのリンク機能などを予定している。

また、現在、授業の履修登録や休講情報、学生生活についての掲示などは筑波大の複数のウェブサイトに分散している。同室によると、将来的にはそれらのウェブの機能をアプリにまとめ、学生生活の利便性を向上することも検討しているという。アプリの配信はiOS版、Android版の両方を4月以降に行う予定。

同室の担当者は「アプリの配信でより多くの寄付が集まることを期待している」と話した。

茗渓会

「掻い掘り」で庭園を改修

東京キャンパスの占春園



外来生物を捕まえる子どもたち（1月13日、東京都文京区で）

筑波大学東京キャンパス（東京都文京区）の庭園「占春園」（約1・2平方キロメートル）にある「落英池」（約423平方メートル）の水を抜く「掻い掘り」が13日、筑波大などの同窓会組織、茗渓会（東京都文京区）の主催で行われた。清掃と外来生物の駆除が目的で、文京区周辺の地域活性化を目指すNPO法人などが協力。一般募集で集まった小学生約30人と、その保護者が参加した。

筑波大が所有する占春園は庭園内の荒廃が進み、昨年3月まで立ち入り禁止だった。茗渓会は17年9月から今年6月まで、同園の改修や整備などを目的に「占春園再生プロジェクト」を行っており、今回の掻い掘りはその一環。

当日、小学生は気温5～6度のもと、午前10時から1時間半ほど池の中で活動。網やバケツを持ち泥水の中でコイやミシシッピアカミミガメなどの外来生物を探した。

参加した小学生は「コイは巨大でぬるぬるしていたが、頭を抱え込んだら捕まえられた。寒さや泥汚れは平気だった」と話した。

茗渓会事務局長代理の岩田敏昭さんは「子どもたちが楽しそうだった。奇麗になった占春園を見るのが楽しみ」と話した。（後藤佳怜＝社会学類1年、写真も。12面に関連写真）

米国支援で授業開設

「アートセラピー入門」

筑波大学は米国の資金提供を受け、欧米で普及する心理療法「アートセラピー」を紹介する授業「アートセラピー入門」を、5月から2年間開設する。講師は米国で公認アートセラピストとして活動し、27年間つくば市と土浦市を中心に同療法の啓発活動を行う大久保シェリル氏が務める。

同療法は、患者が描画などの芸術表現を通じ、心身の健康を取り戻す。欧米では資格を持つ専門家が病院や刑務所で治療を行うが、日本では専門家が養成されていないという。授業は各学期に5回ほどの集中講義の形式で、受講者は各科目50人を予定。来年度の開設科目は学群1年生以外の学生が受講できる。

アートセラピーは2017年4月、ペンス米国副大統領夫妻が来日した際、芸術家でもあるカレン夫人が、日本で広めたいと発言。その話を聞いた大久保氏が同療法を日本の大学で啓発しようと、米国政府に資金提供を要請した。この結果、昨年11月に筑波大で授業を行う資金として、約630万円を大久保氏に提供することが決まった。

以前から大久保氏と面識があり、今回の講座開設に尽力した村上史明助教（芸術系）は、「アートセラピーはケアにアートが融合したもの。筑波大は医学群も芸術専門学群もある総合大学だが、この分野の専門家はいなかった。講座開講を機に、学生にアートセラピーを知ってほしい」と語った。（遠子内早紀＝教育学類1年）

筑波大収蔵庫で発見

パレオパラドキシア展示会

筑波大学の古生物標本収蔵庫で60年以上保管されていた化石が、1000万年以上前に絶滅した海生哺乳類「パレオパラドキシア」の骨と判明したことを機に、その全身骨格模型などを展示する展覧会が昨年12月3日から1月31日まで筑波大学サテライトオフィス（つくば市吾妻）で開かれている。

化石は2017年6月、同収蔵庫で発見。調査の結果、パレオパラドキシアの右大腿骨（だいたいこつ）であることが判明し、大きな反響を巻き起こした。展示ではパレオパラドキシアの化石の実物と、化石を基にコンピューターで復元した全身骨格模型やその3D動画が見られる。

展示世話人の上松佐知子准教授（生環系）は「パレオパラドキシアの生態に関する最新の研究とコンピューター技術を使って復元された骨格モデルは非常に貴重。多くの人に見に来てほしい」と語った。また、来場した高校生は「一部の化石から全身の骨格模型が作られていて、驚いた」と話した。（佟其志＝社会学類1年、写真も）



パレオパラドキシアの骨の展示（昨年12月19日、つくば市吾妻で）

「つくば経済新聞」

ウェブでスタート

つくば市などのニュース記事を掲載するウェブサイト「つくば経済新聞」が昨年12月10日に始まった。同サイトは地元のイベントに関するニュースを中心に、平日1日1記事を掲載する。同サイトの編集長は、つくば駅前でコワーキングスペース「up Tsukuba」（つくば市吾妻）を経営する江本珠理さんが務める。また、記者として筑波大学生など3人が活動している。

江本さんは「サイトでの記事の投稿を通じて、つくば市の中心部だけではなく、周辺の地域の活性化を目指したい」と語った。（木村誠、森賀遼太）

東京大学新聞

新　聞

最新の学術動向から身近な学内トピックスまで、日々東京大学から発信される旬なニュースを週刊でお届け。通常号のほか就職、大学院、受験、資格、入試等、テーマ別の特集号も含め年間42回発行

出　版

好評発売中！

東京大学情報本
『東大2018　東大オモテウラ』
1,620円（税込）

東京大学新聞年鑑2017－18
『はじめての東大』1,620円（税込）

公益財団法人 東京大学新聞社

〒113-8691 東京都文京区本郷7-3-1 東大構内
電話 03(3811)3506　E-mail post@utnp.org
ウエブサイト http://www.todaishimbun.org/company
オンライン版 http://www.todaishimbun.org/

東京大学新聞

1920年の創刊以来、東京大学の「今」を発信し続ける



© 東京大学新聞社 2019

定期購読のお申込は、お電話もしくはメールアドレスまでご連絡ください。

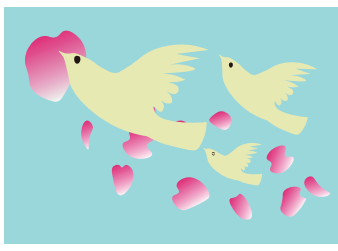
購読料金（送料・税込）
1年間… 7,300円
2年間…14,200円

広告掲載欄

広告のお問い合わせは

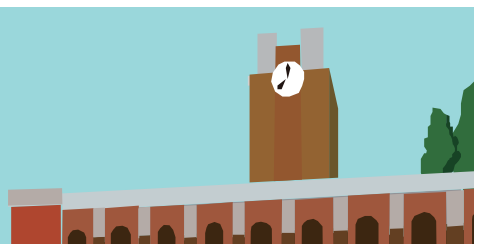
電話 029-853-6699

メール shinbun@un.tsukuba.ac.jp



退職教員4人に聞く

教員人生の軌跡



多種多様な専門を持つ教員がそろう筑波大学。今春も教育者として、研究者としてさまざまな経験を積んできた多くの教員が定年退職を迎える。4人の教授にその軌跡を聞いた。（小池凜太郎＝比較文化学類、中村瑞歩＝日本語・日本文化学類、後藤佳怜、牧田宗大＝社会学類、竹添そら＝知識情報・図書館学類）

山中 弘 教授（人社系・宗教社会学）

学生との議論を楽しむ

宗教と社会との相互関係について研究する「宗教社会学」が専門。2017年からは日本宗教学会の会長を務め、宗教学研究の発展に尽力してきた。

早稲田大学文学部入文学科卒業。ヨーロッパの社会や文化を学ぶ中で、宗教の影響力の強さに関心を持った。近代社会の成立に宗教が大きな役割を果たしたことを説いたマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を読み、宗教社会学に強くひきつけられた。

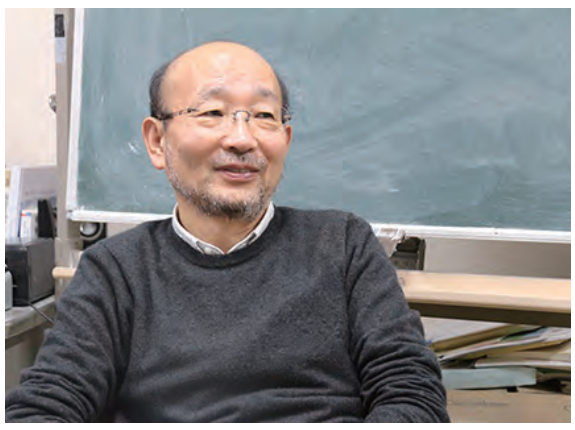
その後、筑波大学大学院に進学。博士課程修了後、愛知学院大学教授などを経て、01年に筑波大教授となった。

05年に各国の宗教の教義や歴史などを分かりやすく解説した『宗教学入門』（ミネルヴァ書房）を著した。同書は宗教学自体の歴史をはじめ、用語解説や宗教学を学ぶ上での図書館やインターネットの利用方法なども紹介。宗教学の入門書として広く読まれている。

現在の宗教をとらえる上で、注目したのは聖地や霊場を巡礼する「宗教ツーリズム」。12年にはツーリズムを宗教社会学的な視点から初めて論じた『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』（世界思想社）を著した。また、アニメの舞台やパワースポットなどが「聖地」として多くの人をひきつけていることにも注目。「伝統的な宗教とは異なり、メディアを活用し自分たちで新たに聖地を創造する新しい宗教現象として研究している」と語る。

学生の問題意識を刺激するような授業を行うことを、常に心がけてきた。「私の考え方を押し付けるのではなく、学生の考える基礎となる知識を教えることを重視してきた」と話す。また、授業では学生との議論を大切にしてきた。「私の意見への同調ではなく、自分の意見を言う学生がいると、新たな発見をすることができる」とほほ笑む。

退職後は「引き続き宗教社会学の研究を続け、自分の研究をまとめたい」と話す。また、人文学を学ぶ学生へ向け「自明だと思われている事柄を立ち止まって考えてほしい」と語った。



現代の聖地創造を研究

恩師との出会いが人生変える

地球上の生物の中で最も多くの種類を持つ昆虫は、進化の過程が明らかでないものも多い。どのように進化したのかを解明するため、昆虫を採集し観察する研究を筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所（長野県上田市）で約40年間続けてきた。

小さい頃から虫が大好きだった。病弱で周りの子と同じように遊べなかったため、晴れの日は自宅の庭にいる昆虫を観察し、雨の日は昆虫図鑑を読んだ。「この頃から、昆虫とは一体どんな生き物なのかを考えるようになった」と話す。

高校時代には鳥にも興味を持つようになった。東京教育大学入学後、冬鳥の観察に行った菅平高原実験所で、その後の恩師となる昆虫学者の安藤裕氏に出会う。安藤氏の研究室を最初に訪れた時、サツマゴキブリの胚＝🔑＝を顕微鏡で見せてもらった。昆虫である対の足をもつ。だが、その胚には成虫にはないたくさんの足があった。

成虫にはない足がなぜ発生＝🔑＝の初期に作られ、そして消えるのか。その理由は、昆虫の祖先がムカデのような足の多い生物から、バッタのような3対の足をもつ生物に進化したためと考えられている。生物学には発生の過程で、その種の進化の過程の痕跡が現われるという法則がある。その法則を身を持って感じた瞬間だった。「安藤先生との出会いが、昆虫の本質への追求意欲をさらに強くした」と語る。

大学卒業後は、筑波大大学院に進学。理学博士の学位を取得したのち、研究者の職を探したが見つからず、6年間は無職だった。夜間は生計のためのアルバイト、日中は昆虫採集と解剖、スケッチなどの研究活動の日々を続けた。その後、筑波大の講師などを経て教授となった。

研究活動では全部で約30目とされる昆虫類の系統のうち、22目の発生の過程を明らかにした。2003年には「原始的昆虫を中心とする比較発生学」の研究で第1回日本節足動物発生学会賞を受賞した。

退職後は同学会の会長を務めながら、まだ研究を終えていない残り10目の進化過程を調べる。「昆虫の研究者としてやり抜きたい」。

学生に対しては「役に立つことばかりを追い求めるのではなく、純粋な興味を大切に研究し、学問によって自らの世界観を手にしてほしい」と語った。

🔑発生＝生物が受精卵から成体になるまでの過程。発生の途中には、進化の過程で失われた器官が現われることもある。そのため発生の過程が明らかになると、その昆虫の進化の過程も分かる。



昆虫進化の過程を探る

町田 龍一郎 教授（生環系・昆虫比較発生学）



緑川 信之 教授（図情メ系・図書館情報学）

手探りの中研究を続けた

図書館情報学の中でも、主に図書館の図書の配列に利用される分類法の研究を行ってきた。

高校生の頃は社会科学系の学術書をよく読んでいた。理論的な学問分野が好きだったため、物理に興味を持ち、慶應義塾大学工学部へ進学した。

転機は就職活動。同大大学院工学研究科修士課程在学中に、本好きが高じて本に携わる職業に就きたいと考え、国立国会図書館の就職試験を受験。試験には落ちたが、同大の教員に誘われ、同大大学院文学研究科図書館・情報学専攻修士課程に進んだ。大学院では理系研究者の学術書の利用手段や利用目的、研究者間での学術情報の引用方法などを研究した。

大学院修了後、図書館情報大学に助手として着任。図書の分類の研究を始めるきっかけは、その4年後に訪れる。当時、図書の分類に関する授業を行っていた藤川正信教授（当時）の学長就任に伴い、担当授業とともに研究も引き継ぐことになった。「当時は図書の分類の研究はあまり盛んではなく、研究論文と呼べるものがほとんどなかった。最初のうちは手探りだった」と話す。

研究を進めるうちに、図書の分類は実際の図書館業務の中で生まれたものが多く、経験則に基づいた手法が多いと感じた。それまで曖昧だった分類方法の理論化を目標に研究を進め、日本十進分類法をはじめとする各国の図書の分類法5つを理論的に説明した『本を分類する』（勁草書房）を著した。同書では分類法の違いについて、初心者でも分かりやすく区別、解説した。

教壇を去ることで「学生の新しい考えに触れる機会がなくなるのはさみしい」と話す。また、人文学を学ぶ学生へ向け「自明だと思われている事柄を立ち止まって考えてほしい」と語った。

図書の分類方法を理論化

現地を訪れる大切さを説く

海水浴場や街並みといった観光地の成立、変遷などを事例に、場所に対する人々の認識の研究を行ってきた。また、地域の食などを通じて、生活文化や人間が持つ価値観について研究した。

東京都出身で、研究生活の原点は自身の旅行好き。高校生のとき親に秘密でパスポートを取得、韓国を旅行した。進学した愛媛大学では「4年間を1400泊の旅行に見立て、愛媛県内や近隣県へ毎日のように旅に出かけた」と話す。

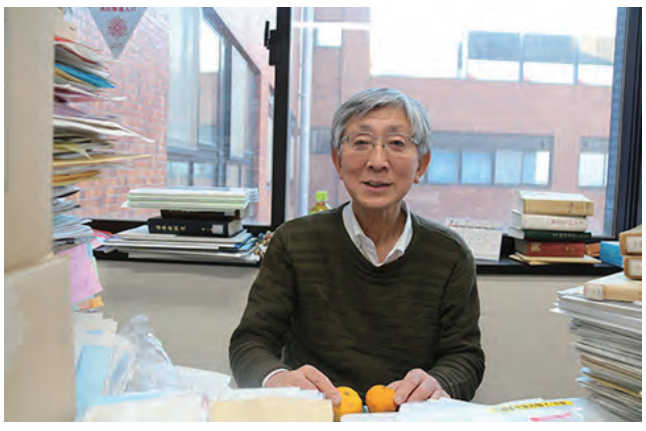
大学で実際に現地を歩き情報を集めるフィールドワークの重要性と楽しさを知り、地理学研究者を志すようになった。そして、文献研究だけではなくフィールドワークを重視する筑波大学大学院に進学を決めた。

大学院時代は、明治時代の日本人が監獄など人間の好まない場所についてどう感じていたかを研究。満期退学後は城西大学に9年勤めたのち、筑波大（日本語・日本文化学類、歴史・人類学専攻）に助教授として着任した。授業では実際に現地を訪れることの大切さを強調した。年に数回は学生を全国へ連れて行き、景観からその土地の特色を読み解く学習（巡検）を実施した。

研究生活の中で「人間の価値観の変化によって、場所への認識も変わる」という考えを大切にしてきた。その考えを生かした研究成果の一つに埼玉県川越の観光地化がある。明治期の大火をきっかけに築かれた蔵造りの街並みもともと観光資源ではなかった。以後、街並みに対する価値づけがどのように変化し、観光地化したかを明らかにした。

『地歴高等地図―現代世界とその歴史的背景―』（帝国書院）の編集にも携わった。同書は高校生に向けた地図帳で、多くの高校で採用されている。

退職後は私立大学の非常勤講師として教育活動を続ける。研究生活を振り返り「自分の好きなことが仕事になった。こんなに幸せな人生はない」とほほ笑みながら語った。



小口 千明 教授（人社系・歴史地理学）

旅を原点に観光地調査

記者の声



森賀遼太

不審者

被害にあったらすぐ通報を
連絡・相談体制の周知を

昨年、筑波大学周辺の天久保2丁目で、女子学生が車の中に連れ込まれそうになったほか、平砂学生宿舎1号棟横で女子学生が胸を触られる事件があった。大学周辺での不審者問題を取材してきたが、今回、2件のうち1件は警察や大学などへの連絡・相談が遅れ、もう1件はそれが全くなかったことが分かった。警察の担当者は「相談や通報がなければ捜査はできず、通報が遅れると事件解決が困難になる」と話す。不審者による事件では被害にあったらすぐ通報することを心がける一方で、警察や大学には現在ある通報・相談体制の周知を求めたい。

関係者によると天久保2丁目の事件で被害者はまず、友人に相談。だが、大学側（担当教員）への連絡と、警察への通報は事件から約1週間後だった。一方、平砂学生宿舎の事件で被害学生は両親に連絡しただけで、警察や大学への連絡や相談は全く行っていなかった。

私が取材しただけでも大学周辺の不審者による事件で、警察や大学などに通報や相談をしていない事件はほかにもある。例えば同じ昨年、大学周辺で自転車に乗っていた男子学生が乗用車に付きまとわれる事件が起きているが、結局「その後は何事もないため」（本人）警察には通報しなかった。だがこれでは事件が解決に向かわず、不審者が野放しになってしまう。

これら被害者の中には「通報しても取り合ってもらえるのか」などと通報をためらう人がいる。だが警察の担当者は「事件直後にとるべき行動などを助言したり、事件現場周辺のパトロールを行うなどできることは多くある。困ったらとにかく通報してほしい」と話している。

一方、警察や大学の対応にも指摘したいことがある。警察は1990年、110番通報ではなく、気軽に事件や事故などの相談ができるダイヤル「#9110」の全国的な運用を開始。だが、私が取材した被害学生らにこの番号について聞くと、全員がその存在を知らなかった。

一方、筑波大では学内で不審者による事件に遭遇した場合の連絡先や相談先をまとめた冊子を入学時に新入生全員に配布している。また、新入生に筑波大を紹介する必修授業では、大学職員がこれら連絡先などを再度説明してもいる。だが、今回の被害学生全員がこれら連絡先などを「知らない」という。入学直後のことで忘れてしまったのかもしれないが、だとしたら、大学側にはこれら連絡先の周知を繰り返し行ってほしい。

不審者の被害を防ぐには学生も防犯意識を高めることが重要だ。被害学生の中には深夜に街灯が少ない道を一人で歩いたり、イヤホンを付けたまま無防備に歩いていた人もいた。比較的明るい道を選んで歩く、深夜の一人での外出を避けるなど、被害を防ぐ方法はある。

ある被害学生は「まさか自分がこんな目に遭うとは思わなかった」と言う。だが、自分の身に危険が及ぶ可能性は誰にでもある。普段からそれを最小限に抑える努力が求められている。（筑波大学新聞副編集長・社会学類2年）

筑波時評

改正水道法

問われる民間参入の成否
法律成立の責任は有権者に

昨年12月の第197回国会で改正水道法が成立した。ここで話題になるPFI（Private Finance Initiative）とは「公共施設等の設計、建設、維持管理及び運営に、民間の資金とノウハウを活用し、公共サービスの提供を民間主導で行うことで、効率的かつ効果的な公共サービスの提供を図る」（引用＝日本PFI・PPP協会）ものをいう。

改正水道法では自治体が水道事業の所有権を維持し、民間事業に対して事業認可を行い、民間企業に運営を委ねることを認めるもので、「コンセッション方式」と呼ばれている。水道に限らず、公共事業は安全で安価なサービスを提供することを目的にしている。事業の一部に民間事業が参画することで政府の財政負担が減り、民間の知恵を取り入れることができる。他方で、料金高騰・サービスの質の悪化・災害時の給水体制の確保・財政情報の透明性の問題を政府は抱えることになる。

我が国の水道網は1960年代の高度経済成長期に整備されている。その耐用年数を越えた水道管が増えて、維持費がかさむようになった。導入の判断は自治体にゆだねられ、その選択と給水の最終責任を住民が負う。改正水道法の成否は、業務・経理状況の報告・調査、そして場合によっては運営権の行使停止や取消が十分に執行できるか、にかかっている。

今後、水道運営のノウハウを有する企業の参入が予想される。利益を得た経験値を有する企業は海外の企業かもしれず、水道事業の利益は地元住民に流れないかもしれない。広域連携は高齢化し、過疎化する自治体の連携を可能にする手段のひとつかもしれない。自治体は運営権を売却することで利益を得て、新規インフラを作ってまた売却することもできるかもしれない。

改正水道法に限らず法律は、民主主義の熟議の結晶というよりは利益団体の妥協の産物、多数派の審議無視の独断専行と評価されることがある。この評価は法律家でも大学の教員でもなく、有権者が行い、その責任を負う。住民は他国の成功や失敗例、委員会の審議の経過、同法律の文言を注意深く観察する技能が求められる。

文頭で紹介したPFIについて「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律の一部を改正する法律」は昨年2月に提出され、同年6月に公布されている。そして、冬に話題になった改正水道法が成立したのは同年12月である。公共サービスに関する議論は突然、登場してきた問題ではない。



辻　雄一郎　准教授　（公法学）

人文社会系・准教授。筑波大学地域と気候変動の社会問題解析ラボラトリー長。カリフォルニア大学バークレー校で法学修士と法学博士を修了。2013年より現職。

民村新報

外国人労働者の受け入れ拡大

昨年12月、出入国管理及び難民認定法が改正された。同法は4月1日に施行予定で、5年間で介護や外食など14業種で最大約34万5千人の外国人労働者を受け入れる見込みだ。政府はこれまで原則として外国人の就労目的の在留を認めておらず、大学教授など高度な専門人材に限り受け入れてきたが、今回の改正で単純労働に従事する外国人労働者が大幅に増える。筑波大学生は外国人労働者の受け入れ拡大をどう思うのか。中央図書館前などで聞いた。（西村大祐＝人文学類1年、木村誠＝同2年、池田花於里＝比較文化学類2年）

【工シス2年・男性】
ニュースで、外国人労働者が最低賃金以下で働かされていると聞いた。今の日本の状態で受け入れを拡大するのは危険だと思う。

【人文4年・男性】
受け入れ拡大の利点、欠点などをよく知らない。受け入れ拡大の理由や、拡大後にどうなるのかなど、国民全体で理解を深めなければいけないと思う。

【障害2年・女性】
詳しく知らないが、今でも外国人の店員が多くいるので、見た目には何が変わるのかよく分からない。分かりやすい形で今後の影響を説明してほしい。

【人文2年・男性】
改正に賛成。日本は少子高齢化で労働人口が著しく減っており、それを補うために外国人労働者の受け入れ拡大は自然だと思う。治安が悪化するという議論もあるが、アルバイトで外国人労働者と働いていても、危険を感じたことは一切無い。コンビニでも外国人店員が増えているが、悪い印象は受けない。

【比文2年・女性】
外国人労働者を排除する理由は特段ないと思うので、賛成。日本人と共生していければ良いと思う。

【人文2年・男性】
介護業などの人手不足が深刻で、外国人労働者が必要なのは分かる。しかし、外国人労働者の待遇や治安悪化などの点で、議論が十分されたとは言えず、性急に改正案が可決されたと思う。今後も議論が必要だ。

【EMP1年・女性】
受け入れ拡大は良いと思う。優秀な外国人と一緒に働くことで、日本人の意識も高まるのではないか。

【応理2年・男性】
外国人労働者に偏見を持たず、相手の文化を理解できるなら受け入れ拡大に賛成。ただ、外国人と距離を置く傾向のある日本の現状を鑑みると難しいと思う。

【社学3年・男性】
（外国人の流入による）治安悪化が懸念されているが、外国人旅行者や外国人居住者が年々増える一方で、犯罪は減っている（警察庁によると、外国人による犯罪の検挙件数は2005年から16年にかけて、約7割減少）のを見ると、その心配はないと思う。だが、労働力不足を外国人労働者の「安い」労働力で補うのなら反対だ。

【人文4年・女性】
受け入れ拡大よりも、外国人技能実習制度＝🔑＝などでの外国人労働者の待遇改善の方が先決だ。政府には早急な対応を求めたい。

🔑外国人技能実習制度＝途上国の外国人が日本の企業などに雇われ、建設や食料品製造などの職種で技能を学ぶ制度。途上国への技能の移転を目的とし、1993年に始まった。

あなたの家のお雑煮は？

正月に多く食べられるお雑煮は、地域によって餅の形や具材などが異なっている。全国から集まる筑波大学生は、どんなお雑煮を食べてきたのか。中央図書館前や春日エリアなどで聞いた。（加藤優花＝国際総合学類1年、遠子内早紀＝教育学類1年、竹添そら＝知識情報・図書館学類2年）

【工シス3年・男性＝山形県出身】
毎年、実家のお雑煮にはお吸い物に鶏肉、三つ葉、人参、お麩、わらび、丸餅が入っている。家で餅つきをするので、その餅をお雑煮に入れる。

【物理1年・男性＝鳥取県出身】
地元では丸餅を入れた小豆汁がお雑煮として一般的で、ほかの地域のお雑煮の話を聞くまでそれが普通だと思っていた。甘くてお汁粉のようなお雑煮だったが、自分は小豆が嫌いなので食べなかった。

【国総1年・女性＝母が山形県出身】
昨年まで家族で米国にいたが、毎年母が作るお雑煮を食べていた。しょうゆベースのだしに丸餅、牛肉、人参、ごぼう、しらたきが入っていた。

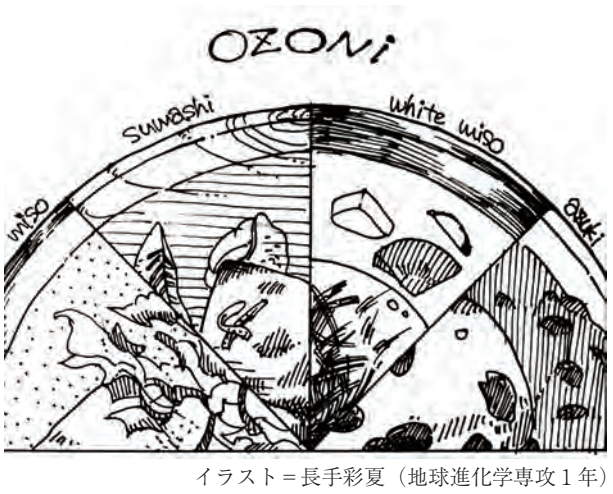
【生環2年・女性＝母が栃木県出身】
母が作るお雑煮を食べる。しょうゆベースのだしに角餅、人参、大根、きのこが具材として入っている。

【工シス1年・女性＝熊本県出身】
実家に餅つき機があり、ついた餅をちぎってお雑煮に入れていた。お吸い物に、丸餅、しいたけ、こんぶ、筍、お麩、かまぼこ、人参が入っている。だが、自分の苦手な食べ物ばかりなので汁しか飲まなかった。

【知識図書2年・女性＝母が長野県出身】
我が家は毎年、お雑煮に手作りの餅を入れる。母の実家で餅つきをするのが恒例行事。親戚や近所にも配り、形の不揃いなものをお雑煮に入れて食べる。つきたての餅で作るお雑煮はとても美味しい。

【メ創2年・女性＝祖母が京都府出身】
毎年、祖母が作る白味噌味の京風お雑煮を食べる。具材は餅のみか、ほうれん草が少し入っている。正月の親戚が集まる場で振る舞われる正月料理の中で一番好きだ。

【物理1年・男性＝祖母が大阪府出身】
祖母がお雑煮を作ってくれる。毎年、白味噌と赤味噌の合わせ味噌の汁に、大きな餅と大量のかつお節が入っている。具材は少ないが、餅が大きいので満腹になる。



イラスト＝長手彩夏（地球進化学専攻1年）

豊かな表現で世界観歌う

混声合唱団 定期演奏会

筑波大学混声合唱団の第43回定期演奏会が昨年12月8日、ノバホール（つくば市吾妻）で行われた。演奏会は4つの合唱曲集が披露され、美しい歌声で来場した約370人を魅了した。



合唱を披露する混声合唱団の団員ら（昨年12月8日、ノバホールで）

第1部は寺山修司作詞、信長貴富作曲「カウボーイ・ポップ」。寺山修司が書いた独特な言葉遣いの5つの詩を、信長貴富が楽しく歌える合唱作品として作曲した作品で、冒頭の狼の遠吠えを連想させる口笛の音色とテナーの歌声が、カウボーイが活躍する西部劇の世界観を表現した。

第3部では、ドイツ語の作品「Zigeunerlieder」（日本語訳・ジプシーの歌）が歌われた。ヨーロッパ各地を移動しながら暮らす「ジプシー」青年の、恋人との幸せな日々や別れを表現した詩に合わせ、時に軽やかに時に荒々しく曲調が変化する。力強い男声と悲しげな女声が、ジプシーの恋を感情豊かに歌いあげた。

渡邊千容（ちひろ）元団長（教育3年）は、「1年間、練習を重ねてきたが、本番はあっという間に終わってしまった。一瞬一瞬に気持ちを込めて歌うことができた」と語った。（遠子内早紀、写真も）

蝋型ブロンズ彫刻展

日伊の文化交流をテーマに

中村義孝教授（芸術系）が研究する特殊な鋳造法を用いたブロンズ（青銅）彫刻の展覧会が昨年11月6日から同年12月22日まで、大学会館など筑波大学内の3会場で開かれ、中村教授らイタリアと日本で活躍する彫刻作家32人の約50点が展示された。

この鋳造法による彫刻は「イタリア式蝋型ブロンズ彫刻」と呼ばれ、1950年代にイタリアから日本に伝わった。従来の青銅彫刻では彫刻家は石こうや粘土で原形＝🔑＝を作るだけで、鋳造は鋳造家に任せていた。一方、イタリア式蝋型ブロンズ彫刻では、原形を蝋で作ることにより、従来に比べより細かな表現が可能になる。また鋳造も彫刻家自身が行ったり、鋳造家に指示を出すこともあり、中村教授によると、彫刻家の意図を作品により強く出す事が可能になるという。

中村教授の出品作『力士』は、牛久市出身の元横綱稀勢の里の顔を題材として作られたもので、同作品はイタリアで開催された展覧会にも出品されていた。中村教授は作品について、「日伊両国の相互交流がテーマ。日本を代表する文化の一つである相撲をイタリアから伝わった鋳造法で表現したかった」と話した。

展示について、中村教授は「イタリアと日本の彫刻家達の協力があってこそ成り立った展示。じっくりと作品を味わってもらえたならうれしい」と語った。（大森春歌＝芸術専門学群1年）

🔑原形＝青銅彫刻を作る際、土や石こうなどで作るもととなる形。



稀勢の里の顔をイタリア式蝋型ブロンズ彫刻で表現した作品『力士』＝中村義孝教授提供

星空コンサート開催

音楽と映像のコラボ

つくばエキスポセンター（つくば市吾妻）のプラネタリウム内で昨年12月15日、クラシック音楽の生演奏と、音楽に合わせた映像を楽しむ「第31回星空コンサート」が開かれた。同コンサートは2016年から定期的に開催。今回は映像として芸術専門学群の学生が卒業制作で作成したアニメーションが投影された。

会場ではモーツァルトの『アイネクライネナハトムジークより 第1楽章』や『ジングルベル』などのクリスマスメドレーをプロの弦楽四重奏団が演奏。モーツァルトの曲に合わせ、プラネタリウムの天球を上に登るらせん状の光の筋のアニメが投影された。また、クリスマスの華やかなメロディに合わせアニメのサンタやトナカイが空を駆け、会場から歓声が上がった。

映像を制作した髙松航希さん（芸専4年）は、「（使用した）アニメは1秒あたり30枚の画像が必要だった。時間が少なく苦労した」と語った。コンサートの中盤では、エキスポセンターの職員がオリオン座やおおいぬ座などイベント当日につくば市内で見られる星座の解説もした。（遠子内早紀、12面に関連写真）

絶対音感

M.A

旋律と音色の変化で「世界旅行」

筑波大学吹奏楽団

筑波大学吹奏楽団の第80回定期演奏会が昨年12月7日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。演奏会のテーマは「世界旅行」。様々な旅を表現した全9曲で観客を楽しませた。

演奏会は3部構成。第1部の最後に演奏されたのは「大いなる約束の大地～チンギス・ハーン」だ。指揮者の松下虎太朗さん（日日2年）は「日本の伝統音楽とモンゴル民謡の『出会い』を表現した」と話す。冒頭、日本の雅楽を思わせるフレーズをフルートのソロが妖しげに奏でる。合間には、バスドラムや拍子木といった打楽器が象徴的に鳴り響き、会場は静かな緊張感に包まれた。

その後、金管楽器が雅楽風の旋律を奏で、打楽器のドラや鈴も加わり、重厚感の増した演奏で盛り上がりは最高潮に。だが、ここで場面は一転。スネアドラム（小太鼓）が軽快なリズムを刻み、モンゴル民謡を模したピッコロが加わる。その旋律は、モンゴルの大草原を駆け抜ける騎馬を彷彿とさせた。

ピッコロのソロが奏でたモンゴル民謡風の軽快な旋律はさまざまな楽器に引き継がれていく。その中で、金管楽器が前半の雅楽風の旋律を再度奏でる場面がある。日本とモンゴル、国境を越えた2つの音楽が「出会う」瞬間となった。一説によると、モンゴルの民謡は日本の小唄に取り入れられたという。もしそうならば、ここは「出会い」でなく、「再会」。確かに2つは見事に調和していた。

第2部で演奏された「Around the World in 80 Days」は、小説「80日間世界一周」をテーマとした吹奏楽曲だ。小説は、仲間と「80日間で世界を一周できなければ全財産を支払う」という賭けをしたイギリスの資産家フォッグが、世界一周を遂げるまでを描く。

曲は旅の始まりを表す金管楽器の華やかなファンファーレで始まる。その後、テンポが上がり、機関車でロンドンからスエズへと移動する様子をスネアドラムやトロンボーンで表現した。

その後、アラビアンナイトの世界を思わせる妖艶なフルートとクラリネットが続き、合間には象の鳴き声を模した金管楽器の音色が響き渡る。またシンセサイザーによる銃声音でアメリカ西部を表すなど、道中に立ち寄ったさまざまな国を音楽で表現した。また、訪れた国ごとに照明の色も変え、会場を盛り上げた。

最後は、旅の成功を祝して冒頭と同様のファンファーレ。筑波大吹奏楽団による世界旅行は、大きな拍手と共に幕を閉じた。（中村瑞歩＝日本語・日本文化学類2年、写真も）



演奏を終えた吹奏楽団の団員ら（昨年12月7日、ノバホールで）

原点 GEN-TEN

鬼界（きかい）彰夫 教授（哲学）

人文社会系・教授。ニューヨーク市立大学大学院でPh．D．取得。中京大学非常勤講師などを経て、2006年から現職。著書に、『ウィトゲンシュタインはこう考えた』（講談社）などがある。

研究者になって以来私は、人間にとって言語とは何かという強い関心を持ち続け、言語哲学という領域で研究を続けてきた。とりわけここ20年はウィトゲンシュタインという哲学者の研究に没頭してきた。彼が言語について誰よりも徹底的に考え抜いていて、その思考を辿ることにより他の方法ではできないほど深く言語について考えることができると感じたからだ。しかし彼の著作に出会ってすぐその研究を始めた訳ではない。私は彼の研究を研究者キャリアのようやく後半になって始めたにすぎない。振り返ると私の研究はさまざまな出会いと偶然に導かれて来た。

大学院に入学した年、哲学科の先輩からウィトゲンシュタインの『哲学探究』の読書会に誘われた。最初数名だった参加者は次第に入れ替わり、2年後に読了したとき、最初からの参加者は私だけだった。当時私は17世紀の哲学を専門としていたが、『哲学探究』の読書体験は強烈な印象を私に残した。その全く新しい思考に強く惹かれた。だがその不思議な文体と構成が実証的な探究を受け付けるとは思えなかった。その上この書物には、哲学的議論の途中に「ある像が我々を虜にして放さなかった」（115節）といった私的な回想と思われる表現が何度か突然出現し、全体が一体何について語られているのかを知ることに絶望せざるを得なかった。私は彼を研究対象としようとは考えず、長い間ただ興味深い哲学者として読み続けた。

事情が大きく変わったのは1990年代後半だ。他の研究との関係で彼の晩年の著作を読み始めたとき、大阪大学においられたウィトゲンシュタイン研究者の奥雅博先生（故）から、ウィトゲンシュタインの全遺稿が電子版として近々刊行されることを教わるとともに、関連資料のコピーを頂いた。既刊の彼の書物が死後弟子たちにより編集されたものであるのに対して、彼自身の遺稿に直接接することにより、彼の本当の思考の流れを明らかにする可能性が感じられた。私は98年、彼に関する研究論文を初めて書き、彼の哲学の研究を開始した。奥先生との出会いがなければ、私のウィトゲンシュタイン研究は始まらなかっただろう。私の研究は先生に最も多くを負っている。

次の出会いは彼の「日記」（『哲学宗教日記』講談社、2005年）とのものである。彼の死後42年たった1993年に初めて存在が明かされたこの日記を翻訳する過程で、かつて絶望感を感じた『探究』中の私的回想と思われる部分が、実は彼自身の哲学的過去に対する自省ではないかという可能性が見え、私の研究は新しい方向に向かった。その成果が昨年ようやく一冊の本（『哲学探究』とはいかなる書物か』勁草書房、2018年）になり、私はいま一息ついている。同時に『探究』との古い出会いの記憶にしばし浸ることのある今日この頃だ。

ぶらり俳句 筑波大

「ランタン」

・ランタンに煙るが如き霜夜かな
・この街の冬よランタン七千余
・ランタンのあかり地を這ふ十二月



つくば市吾妻で中村瑞歩撮影

昨年12月15、16日につくば駅周辺で催されていた「ランタンアート2018」を通りすがりに見た。クリスマス間近ということもあり都市の冬の風情があった。「ランタン」という言葉の響き自体が不思議で心惹かれる。オランダ語かと思ったら英語らしい。なぜオランダ語と誤解したのか省みれば「ジャック・オ・ランタン」に「オランダ」が隠れているのであった。こんなダジャレを言う人間にも風情は分かる。

（文・俳句 堀下翔＝文芸・言語専攻1年）

「大学に行きたくなくなった」

本紙　アンケートを実施

【1面参照】「『女は使えない』などの仕事に関する暴言を受けた」「セクハラの被害を周囲に相談したところ、『お前が悪い』と言われ落ち込んだ」――。本紙が筑波大学についてセクハラの現状をアンケート調査したところ、さまざまな声が寄せられた。アンケート結果を分析した上で、筑波大の対応や、先進的な取り組みを行う広島大、そして被害者の声などを取材した。（本紙取材班）

調査結果

アンケート調査は昨年12月に実施。所属する研究室やゼミで何らかのセクハラを「聞いたことがある」、「目撃したことがある」、または「相談を受けたことがある」と回答した教職員は90人（46・4％）、学生は44人（30・3％）だった。

何らかのセクハラを「受けたことがある」と回答した教職員19人のうち、セクハラを受けたときの立場は、助教、講師が4人、教授が3人だった。また、相手の性別及び人数は「男性1人」が最多で9人、「男性複数」が3人、「女性1人」が3人だった。相手の立場は、「役付もしくは年長の教員」が最多で9人。次いで「学生・大学院生」が3人だった。

何らかのセクハラを「受けたことがある」と回答した学生18人のうち、セクハラを受けたときの立場は大学院生（研究生を含む）が12人、学群生が3人だった。

また、相手の性別及び人数は「男性1人」が最多で9人、「男性複数」が5人と続いた。相手の立場は、「指導教員以外で同じ研究室・講座の教員」が最多で5人。次いで「上級生や先輩」、「ゼミなどの指導教員」が4人だった。

セクハラを受けた経験がもたらした影響（複数回答可）についての問いには、教職員は「腹立たしく悔しかった」の6人が最多で、「転勤や退職をしたくなった」、「大学で研究や仕事を続けていく自信がなくなった」、「何も変化はなかった」がそれぞれ4人と続いた。学生は「大学に行きたくなくなった」が8人と最多。次いで、「自分にも落ち度があったと思い、自分を責めるようになった」が5人と続いた。

自由記述

教職員からは、▽容姿や、女は使えないなどの仕事に関する暴言を受けた▽教員も学生からセクハラを受けることがある。年齢や婚姻の有無などを公共の場で聞くことも、セクハラになると知ってほしい▽女子学生への応対は（二人きりになる）研究室ではなく人目のあるラウンジを利用するなど気を付けている▽受け流す方法を身に付けた方が良いと思う……などの意見があった。

学生からは、▽指導教員と学生が同性の場合は、セクハラを気にかける機会は少ないと思う▽被害者を守る体制を整えるべきだと思うが、過度にセクハラを問題として対応で研究に支障が出るのは嫌だ……などの意見があった。

被害者の声

アンケートに回答した学生のうち、「取材に応じる」と答えた2人に、研究室やゼミでのセクハラの実態を直接取材した。

■頻繁な連絡・食事の誘い

理系の研究室に所属するAさんは、研究室の教員から頻繁に食事に誘われたり、研究とは無関係の内容のメールを送られた。

食事に誘われたのは、夜遅くまで実験をして他の教員や学生が帰り、研究室で相手と二人きりになった時。「友達の関係じゃないのに」と戸惑い、やんわりと断った。相手に教わらなければ進められない実験があったため、「気軽に話せる関係を崩したくなかった」。

メールは、迷惑に感じたが無視もできず、相づちを打つなどの返信をした。

一時期は、相手に会うのが嫌で研究室に行きたくなくなった。また、相手と二人きりになる状況を避けるために、研究の進め方にも支障が出たという。

その後、研究室の他の人に相談した。だが、相談相手の中には「嫌だという態度をはっきり示さないお前が悪い」と言う人もおり、「つらい思いをしている自分がなぜ責められるのか」と気分が落ち込んだという。

■授業中のセクハラ発言

大学院生のBさんによると、ある男性教員が授業中、日本は本来草食の地域であると述べた上で、「（所謂）肉食女子は吐き気がする」と発言したという。教員はそれ以前の授業で、セクハラに対応する部署にいたことがあると話していた。

授業は100人以上が受ける講義。Bさんと教員に直接的な関わりはなく、発言は特定の学生を指したものではなかったという。

Bさんは「発言を不快に感じたが、個人に向けられたものでなかったため、相談室などに連絡するという発想が生まれなかった」と話した。

「セクハラ被害 研究に影響」

分析

今回の調査結果を識者はどう見るか。教育機関のセクハラ問題の解決や被害者支援に取り組む「キャンパス・セクシュアル・ハラスメント・全国ネットワーク」会員の武田万里子教授（津田塾大学）と、ジェンダー社会学が専門の小宮友根准教授（東北学院大学）に聞いた。

■武田教授

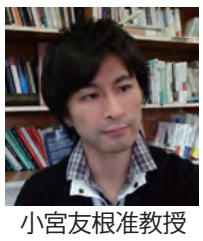
今回の調査のように、被害者になりやすい学生の立場から大学のハラスメントの実態を調べ、対策を求めるのは意義深い。

調査には手法に改善の余地があり、セクハラに耐えながら研究を続けている人や、セクハラの苦痛で既に大学を去った人などの意見を拾えていない可能性がある。だが、教職員・学生共に、主に下の立場の女性が上の立場の男性から被害を受けていることと、その結果、研究環境に深刻な影響があることが分かる。

この背景には、日本の多くの大学で、女性の研究者が少ないことや、職位が上になるほど、男性が多数に、女性が少数になるなど、大学全体の性別格差があると考えられる。

学生の調査 意義深い

■小宮准教授



小宮友根准教授

注目したいのは、被害が起こった際の（筑波大の）相談体制に見直すべき点があるのではないかということだ。教職員・学生共に、学内の相談機関に相談している被害者がきわめて少ない。「誰にも相談しなかった」人が最も多いだけでなく、周囲の人間に相談しても問題が改善していない状況がうかがえる。

また、「大学がセクシュアル・ハラスメントの防止に取り組んでいることを知っているか」という問いでは、教職員の90・7％が「知っていた」のに対し、学生は「知らなかった」という回答が75・2％に上る。学生はそもそも学内相談機関に相談するという選択肢があることすら知らない可能性がある。

調査結果にも表れているとおり、セクハラは被害者の研究・就学意欲を削ぎ心身の健康に大きな影響を及ぼす。このことは研究機関にとっても大きな損失だ。被害を減らすのはもちろん、被害を誰にも相談できない状況をどう解決するかについても改めて考える機会としてほしい。

相談体制に課題

視点

取組みの周知 目指せ

今回の調査では、筑波大のセクハラ防止の取り組みが学生に知られていない現状が明らかになった。

筑波大は2005年以降、ガイドライン制定や相談窓口の設置などの体制づくりを進めてきた。だが今回の調査で、こうした取り組みを「知っている」と回答した学生は、145人のうち36人（24・8％）だった。また、セクハラを「受けたことがある」と回答した学生18人のうち、学内の相談機関を利用したのは1人だけだった。

これらの結果を見て、ジェンダー社会学が専門の小宮友根准教授は、学生は学内相談機関の存在を知らないのでは、と指摘する。記者の中にも「大学の情報が届きにくい」と話す学生は多い。

学生の認知度向上には、教職員の働きかけが有効だと思う。

調査では、筑波大の取り組みを知る教職員は194人のうち176人と9割を占めた。大学として、教職員が指導学生に直接情報を伝えたり、研究室にポスターを貼るなどの取り組みを推進すれば、学生が知る機会は格段に増える。今回の調査では、セクハラを受けた経験が学生の勉学や研究への意欲を削ぐことが明らかになってもおり、これは喫緊の課題でもある。

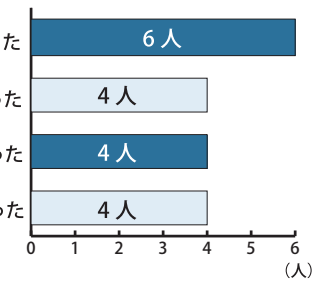
大学院生にセクハラの実態調査を過去3度実施した広島大で、ハラスメント相談室専任教員を務める横山美栄子教授は、「被害が数値化されると説得力があり、（これをもとに）環境改善につながる」と実態調査の意義を語った。今回の本紙調査が、筑波大の勉学・研究環境の向上に生かされることを願う。

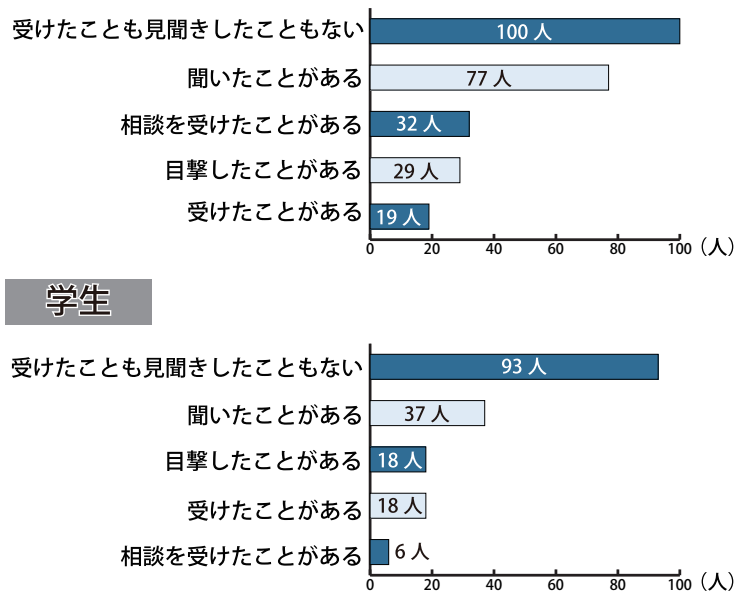
（本紙取材班）

おことわり

◆

今回のアンケートでは筑波大学の教職員が調査の対象になりました。このため記事の客観性を保つことを考慮し、今回、筑波大の教職員の意見は取材しておりません。ご了承ください。





セクハラ被害

相談に応じて3つの解決策

筑波大の対応

■歴史

筑波大は2005年にセクハラや教育・研究上の権力関係によって不利益を受けるアカデミック・ハラスメントなどへの大学側の対応を示した「ハラスメントの防止等に関する規程」を制定。また、各学内組織から選ばれた教職員約30人から成る「ハラスメント防止対策委員会」を設置した。

さらに07年には具体的な事例などを示した「ハラスメント防止等のためのガイドライン」を制定。16年には「ハラスメント相談センター」を設置した。

■相談の流れ

学生や教職員がハラスメントの相談を希望する場合、相談センターのカウンセラー資格を持つ職員や各学内組織の教職員から選ばれる「ハラスメント相談員」の中から相談相手を選べる。相談後はハラスメント防止対策委員会に置かれ、同委員会の教職員で構成される、筑波と東京の「キャンパス部会」が相談者の希望や相談内容、状況に応じて3つの解決策を講じる。

1つ目は、当事者などの話し合いなどで事案を解決する「調停」だ。

2つ目は、当事者が所属する組織の長に教育研究や就業の環境の改善を求める「組織対応」だ。解決方法は組織に一任される。問題解決後は組織が部会に対応の経過と結果を報告する。

3つ目は、相談内容についての事実関係を客観的に調査し、3つの解決策の中で唯一、相談内容をハラスメントかどうか判断する「調査委員会」の設置だ。相談者の希望などを念頭にキャンパス部会が設置を判断した場合、部会委員2人と学外の弁護士1人からなる調査委員会が設置される。同委員会は平均4カ月をかけ関係者に事情を聞き、事実関係を調査する。

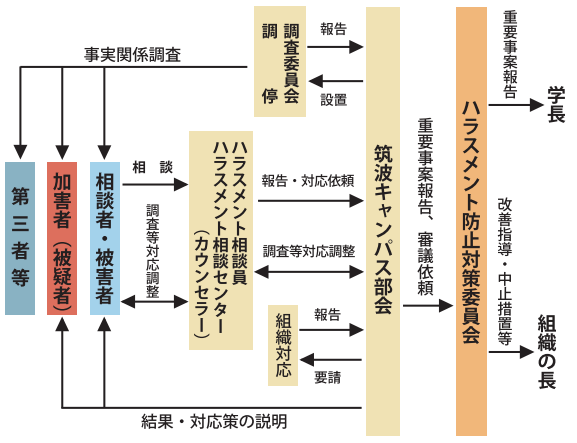
調査委員会は調査結果をキャンパス部会に報告し、部会でハラスメントと判断されると防止対策委員会に報告され、最終的に同委員会が、大学としてハラスメントと認定される。調査結果は当事者に報告される。ハラスメントと認定されると、行為者とその所属する組織の長にハラスメントの根絶と環境の改善などを求める。更に大学は1999年に「ハラスメント相談窓口」を設置し、学内での対応を開始。同時に相談を受け付ける「学内相談員」も配置した。年1回のハラスメント対策に関する研修を受けた教職員が務めており、現在、学内相談員は33人。

また、2009年には、カウンセラーや臨床心理士などを務める学外の専門家「外部相談員」を配置。外部相談員は、学内の学生相談室などに3人配置されている。

■調査委員会の設置も

相談センターの担当者は「ハラスメントが理由で、教育研究や仕事に影響が出ることがあってはならない。快適な環境を作れるよう努力したい」と話した。

筑波大のハラスメント苦情相談への対応（略図）



※筑波大の資料から作成。筑波キャンパスの場合

他大学の対応

■千葉大学

本紙の取材に応じた千葉大学は1999年に「ハラスメント相談窓口」を設置し、学内での対応を開始。同時に相談を受け付ける「学内相談員」も配置した。年1回のハラスメント対策に関する研修を受けた教職員が務めており、現在、学内相談員は33人。

また、2009年には、カウンセラーや臨床心理士などを務める学外の専門家「外部相談員」を配置。外部相談員は、学内の学生相談室などに3人配置されている。

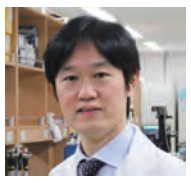
■広島大学

3つ全てのキャンパスに「ハラスメント相談室」が設置されている。04年に全国の大学で初めて、ハラスメントに関する知識を有し相談室直属で被害者支援を行う「専任教員」を配置。それに加え、現在は学外の相談員として弁護士が2人、臨床心理士が1人いる。

また、同大では02年度、11年度、17年度に大学院生の教育・研究環境に関するアンケート調査を実施。調査は個人が特定されない形式で、ハラスメントを受けた経験の有無や相談室の知名度などを選択式で集計した。相談室によると、02年度に比べて11年度は環境型セクハラ＝性的言動によって相手を不快にさせるもの。対価型セクハラ＝相手に性的な要求を行い、その服従または拒否と引き換えに何らかの利益または不利益を与えるもの。セクハラ＝の件数は大きく減ったが、対価型セクハラ＝や性暴力の件数はそれほど減っていなかった。17年度の調査結果は集計中だという。

同相談室専任教員の横山美栄子教授は「ハラスメントに関するアンケート調査は、大学の悪印象を招きかねないため敬遠されがちだが、実態を調べることは大切。今後の対策に生かせる」と語った。

Hello! 先端研究

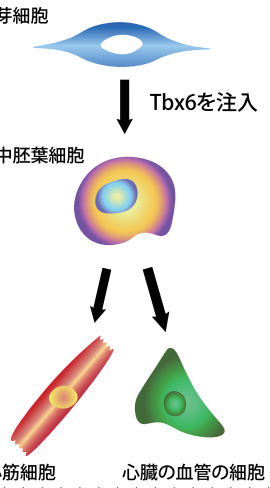


家田真樹教授

心臓治療を大きく前進
安全・安価な画期的治療へ

国内で死因の第二位を占める心筋梗塞や心不全などの「心疾患」。現在、さまざまな細胞に変化できるiPS細胞を利用した治療が期待されているが、細胞のがん化の危険性や高額な費用など、様々な課題が残っている。こんな中、家田真樹教授（医学医療系）を中心とする研究チームは昨年8月、iPS細胞を使わずに心臓のあらゆる細胞の元となる細胞を作ることに世界で初めて成功。安全・安価な画期的治療法に結びつくとして世界の注目を集めている。

心筋梗塞になると心臓への血液が不足し心臓を拍動させる「心筋細胞」の壊死を招く。だが心筋細胞は再生しないため心臓機能が衰え、最悪の場合は死を迎えてしまう。現在、根本的な治療は心臓移植や人工心臓の装着のみ。だが、臓器提供者の不足や体への負担が大きいなどの難点がある。iPS細胞で心筋細胞を作り、心臓に移植する治療も研究が進むが、工程の複雑さや高額な費用のほか、移植時にがんを形成する危険性も指摘されている。



この発見を用いた新たな治療法では、細い管を通してTbx6を直接体内に入れるため、胸を切り開く必要がなく、手術が簡易になる。また、iPS細胞より簡単に心筋細胞を作り出せるため、治療費用が低くて済むほか、iPS細胞で指摘されるがん形成などの課題の克服が期待される。

家田教授は今後、5年後の実用化を目指し、ブタなどを用いた実験で安全性や有効性を確認する。

世界中に多くの患者がいる心疾患。その脅威が克服される日は遠くないかもしれない。（國井俊介＝社会学類1年）

手紙



変化を恐れず柔軟に



常葉大学教授
伊東 明子さん

この原稿を書いている現在、「平成最後」という言葉をよく耳にします。私が大学に入学したのは昭和63年、「昭和最後の年度」でした。翌年に平成となり、時代の変化を体感したことを覚えています。再び新しい時代が始まる今このとき、何がどう変わっていくのか、ぜひ若い感性で見つめて下さい。

私は人間学類（当時）で心理学を学び、そのまま大学院博士課程に進みました。合計10年間（計算が若干合いませんが笑）の筑波生活でした。その後、ご縁があって、故郷静岡にある常葉大学の教員として赴任し、教育学部で心理学を教えています。早いもので21年目を迎えました。異動するのが普通の大学教員稼業で、1カ所にこれだけの連続、ないものだらけの学生生活でした。それでも、不便さを嘆くのではなく、自分たちで工夫して楽しもうというエネルギーにあふれていた気がします。その経験は間違いなく今に活きていて、多少の逆境に置かれても意外とそれを楽しめたり、どこかに打開策を見出したりできる自分がいます。変化を恐れるのではなく、変化を楽しんで積極的に関与していく、これが大事なのかもしれません。

現在大学では学生部長という役割も務めています。学生部とは学生生活全般を扱う部署ですが、この職務を担うようになって、保護者や教職員はもちろん、同窓会や地域、さまざまな外部機関や業者など、大学がいかに多くの方々に支えられているかを知りました。数年前に筑波大学に出張で行ったときのことです。大学本部の方とお会いする機会があったのですが、昔話をする中で、その方は私の学生時代に学生担当であり、学生宿舎に固定電話を設置すべく奔走してくれた方だということが分かりました。その他にもいろいろな苦労話を聞き、そんなことも知らずに遊び回っていた自分を恥じるとともに（笑）、改めて自分たちが温かいまなざしの下に育てられてきたことを実感しました。今は自分が学生を育てる立場にいるわけですが、その役割は自分だけのものではなく、先輩方から受け継いだものであり、次の世代につなげていく使命も担っているのだと感じています。

学生の皆さん、皆さんの大学生活は想像もできないほどの多くの人のつながりの中で成り立ち、たくさんの力に守られています。失敗を恐れることはありません。この時期に思いっきりいろいろな経験をして、たくましくそして柔軟に、これからの時代を生きていくための礎をぜひ培ってください。（平成3年度人間学類卒、写真は本人提供、写真中央）

雪辱果たす勝利
全日本インカレ ９年ぶり優勝

主将・丸尾のスパイク光る


インカレで最優秀選手賞に選ばれた丸尾（中央）（昨年12月2日、青山学院大戦で）＝飯田健介撮影

【大田区総合体育館（東京都大田区）で建内亮太＝人文学類2年、飯田健介＝社会学類2年、12面に関連写真】大学日本一を決める全日本大学選手権（インカレ）が昨年11月27日から12月2日に行われ、筑波大女子が9年ぶり7回目の優勝を果たした。また、丸尾遥香（体専4年）が最優秀選手賞とブロック賞、万代真奈美（同2年）がセッター賞、鏡原叶悠（かのは）（同2年）がリベロ賞を受賞した。

バレー・

準々決勝までストレートで勝ち上がった筑波大。1日の準決勝では、秋季関東大学リーグ戦で敗北した松蔭大を3―1で破り、3年連続の決勝戦へと駒を進めた。

2日の決勝では、前回のインカレ決勝で敗北した青山学院大と対戦。相手の粘り強い守備に苦しめられたが、主将の丸尾を中心にチーム一丸のプレーを見せ、試合を3―1で制し昨年の雪辱を果たした。

第1セット、序盤は一進一退の攻防が続いた。中盤で青山学院大のスパイクに苦しめられ、そのまま19―23まで差をつけられた。だが、丸尾が勝負強さを見せ、スパイクやブロックで6連続得点。25―23でセットを先取した。

第2セットでは、筑波大は第1セット終盤からの気迫のこもったプレーを継続。川上雛菜（同2年）や山城愛心（あみ）（同2年）の鋭いスパイクで得点を重ね、このセットを25―21で奪取した。

第3セット、序盤は拮抗した展開に。次第に筑波大が流れをつかみ、先に20点台に到達。しかし、青山学院大のスパイクなどで4連続失点を喫し、逆転を許した。その後も相手の粘り強いプレーに対し、丸尾のブロックや鏡原のレシーブで応戦するもボールがつながらず、22―25でこのセットを落とした。

続く第4セットを取って勝利を決めたい筑波大だったが、序盤で長いラリーをものにできない展開が続いた。だが、山城の強烈なスパイクで勢いに乗り、14―14の同点につけると、そのまま流れを渡さず、攻勢をかけ続けて得点を重ねた。その後は筑波大がリードした状態で進んだが、試合終盤、筑波大は青山学院大の力強いサーブやスパイクを抑えきれず、20―22で逆転を許した。だが、山城がスパイクで流れを取り戻し、第1セット終盤から好調を維持していた丸尾もブロックやスパイクで得点。25―23で接戦を制し、筑波大が悲願の優勝を決めた。

主将の丸尾は「1点ずつ積み重ねることを意識して戦った。優勝できてうれしい」と喜びをあらわにした。

中西康己監督（体育系・准教授）は「青山学院大は強いスパイクを拾ってくるので、粘り強くつなぐバレーを意識した。優勝はチーム全員の努力の結晶だ」と選手たちを労った。

2年連続ベスト8敗退
無冠でシーズン終える
全日本大学選手権


相手選手を振り切る犬飼（左）（昨年12月17日、駒澤大戦で）

サッカー

【柏の葉公園総合競技場（千葉県柏市）で飯田健介＝社会学類2年、写真も】大学日本一を決める全日本大学選手権（インカレ）が昨年12月12日―22日に行われた。筑波大は17日の準々決勝で駒澤大と対戦し、1―2で敗れ、2年連続のベスト8に終わった。

筑波大は15日の2回戦で仙台大と対戦した。東北大学リーグ優勝校に対し、三笘薫（体専3年）らが躍動。前半だけで3点を奪うなど圧倒的な攻撃力を見せ、4―1で勝利した。

準々決勝の相手は関東大学リーグ最終戦で惜敗した駒澤大。競り合いに強く、縦に鋭い攻撃を仕掛ける相手に対応できず、1―2で敗れた。

試合は前半から激しい攻防が続いたが、互いにチャンスを生かし切れない展開が続く。前半終了間際、ボールを受けた会津雄生（同4年）が中央に折り返し、三笘が合わせたが、ポストに直撃。先制とはならなかった。

後半も拮抗する中、犬飼翔洋（同3年）が山原怜音（同1年）からのクロスを受けてシュートを放ち、ネットを揺らしたと思われたが、オフサイドの判定。先制点が取れず苦しむ中、66分、筑波大は自陣左サイドを崩され、失点を許した。このまま駒澤大ペースで進むかと思われたが、75分、西澤健太（同4年）のCKを犬飼がゴールに押し込み、同点に追いついた。だがその直後、77分に相手のスローインから中央突破され失点を喫した。その後筑波大は追いつくことができず、試合終了。無冠でシーズンを終えた。

主将の小笠原佳祐（同4年）は「絶対に勝つつもりで試合に臨んだが、完全に力負けしてしまい悔しい。この悔しさを後輩たちは生かしてほしい」と話した。

「完全に力負け」

Jリーグ入団会見
5選手が内定

Jリーグクラブに入団が内定した筑波大学蹴球部に所属する5選手の合同記者会見が、昨年12月26日に筑波大本部棟で行われた。

プロ入りが内定したのは、西澤健太（体専4年）＝J1清水エスパルス、鈴木大誠（同4年）、鈴木徳真（同4年）＝J2徳島ヴォルティス、会津雄生（同4年）＝J2FC岐阜、小笠原佳祐（同4年）＝J2ロアッソ熊本の5選手。会見では病欠した小笠原以外の4選手が新チームでの活躍を誓った。

西澤はユース時代に在籍した清水へ復帰。清水では、ユース出身者が大学を経由してクラブに加入するのは初となる。西澤は「必ず清水に戻ると決意していたのでうれしい。クラブの期待に応えたい」と話した。

小井土正亮（こいどまさあき）監督（体育系・助教）は「関東大学リーグ戦や全日本大学選手権（インカレ）での優勝、天皇杯での16強入りなど、筑波大の新たな歴史を築いてくれて感謝している。プロ入り後の成長にも期待している」と5選手を激励した。（飯田健介）

柔道

男子81キロ級 佐々木優勝

各階級の世界ランク上位16人が出場するワールドマスターズが、昨年12月15、16日に中国・広州で行われた。男子81キロ級で世界ランク13位の佐々木健志（体専4年）が優勝を果たした。

2日目の男子81キロ級、佐々木の初戦の相手は世界ランク1位のモラエイ（イラン）。強敵相手に1分59秒で技ありを奪い、更に2分23秒に一本背負投で一本を決めた。好スタートを切った佐々木は、続く準々決勝、延長戦までもつれたが、延長9秒で一本を奪取。準決勝では開始約1分で相手に技ありで先制されたものの、直後に技ありを奪い返した。激しい攻防の中、2分44秒で再び技ありを奪い、合わせ技一本で決勝進出を決めた。

決勝ではラピナゴフ（ロシア）と対戦。長い攻防の中で、中盤に相手に指導が与えられた後、なかなか攻めきれない展開が続いた。だが残り32秒に横車で技ありを奪い、そのまま優勢勝ちで優勝に輝いた。（池田花於里＝比較文化学類2年）

体操

男女アベック優勝
全日本ラート選手権

第24回全日本ラート競技選手権が昨年12月15、16日につくばカピオ（つくば市竹園）で行われた。男子総合では高橋靖彦（平成24年度体育専攻修了）が、女子総合では松浦佑希（体科後期2年）がそれぞれ優勝を果たした。高橋は大会7連覇を達成し、松浦は大会2連覇中の堀口文（体育系・特任助教）を抑え、3年ぶりの優勝に輝いた。松浦は得意の跳躍で難度の高い「後方伸身宙返り2回ひねり」を成功させ、2位の堀口に1・15点と大きく差をつけ1位となった。

松浦は「『後方伸身宙返り2回ひねり』を成功させたい一心で練習していたのでうれしい。周囲の支えあっての結果。感謝の気持ちでいっぱいだ」と話した。（鈴木瑞穂＝人文学類3年）


斜転の演技を披露する松浦（昨年12月16日、つくばカピオで）＝日本ラート協会提供

広告掲載欄

広告のお問い合わせは

電話　029-853-6699

メール　shinbun@un.tsukuba.ac.jp

全日本大学選手権
男女共にベスト4

【大田区総合体育館（東京都大田区）で加藤優花＝国際総合学類1年、写真も】大学日本一を決める全日本大学選手権（インカレ）が昨年12月10―16日に行われた。筑波大は男女共に3位決定戦に進出したが、女子は58―61で白鴎大に敗北、男子は63―76で日本大に敗れ、共に4位で大会を終えた。優秀選手賞には主将の高辻真子（体専4年）と牧隼利（同3年）が選ばれた。

バスケ


第3ピリオド、点差を離そうとシュートを放つ佐藤由璃果（昨年12月15日、白鴎大戦で）

■女子

14日、筑波大は準決勝で愛知学泉大と対戦。高辻を中心とした攻守の連携を見せたが、相手の攻撃を抑えられず、62―79で敗北した。15日の3位決定戦では白鴎大と対戦。終盤まで点の取り合いが続いたが、筑波大は一歩及ばず敗れた。

第1ピリオド、序盤から攻勢をかけていた筑波大は木村珠貴（同4年）や嘉数唯（同1年）を中心に流れをつかんだ。第2ピリオド序盤、筑波大は白鴎大の高さのある攻撃に苦しんだが佐藤由璃果（同2年）のシュートを皮切りに流れをつかみ、30―24とリードし前半終了。

第3ピリオドでも佐藤由璃果が躍動し、得点を重ねた。しかし徐々に白鴎大に点差を詰められ、互いにリードを争う激しい展開に。終盤、白鴎大に3Pシュートを決められ45―47とリードを許した。第4ピリオド、筑波大は積極的にリバウンドを取りシュートを狙った。終了直前に筑波大は3Pシュートを打ち同点を狙ったが、得点には至らず58―61で敗れた。

主将の高辻は「大会を楽しむことがチームの目標だった。試合は負けてしまったが、最後まで勝利を諦めず楽しむことができた」と話した。

■男子

15日、準決勝に進出した筑波大は東海大と対戦。前半は主導権を握ったが、後半から追い上げを見せた東海大を抑えることができず59―75で敗れた。

翌16日の3位決定戦、筑波大は日本大と対戦。日本大の連続得点から筑波大は試合の主導権を奪われ、63―76で敗戦した。

第1ピリオド序盤、筑波大は日本大の守備に苦しめられ、13―18で終えた。第2ピリオドになると一転、筑波大は攻撃の糸口をつかんだ。序盤は牧と森下魁（同3年）を中心に得点。牧の豪快なダンクシュートを起点に、36―33と筑波大が逆転し前半を終えた。

第3ピリオドは一進一退の攻防が続いた。筑波大は日本大のミスを誘い、積極的に攻撃を仕掛けた。筑波大はリードを保ち、51―49で第3ピリオド終了。第4ピリオドに入り、筑波大は日本大の高さを生かした攻撃を止めることができず逆転を許した。森下や菅原暉（同2年）らが粘りをみせたが、63―76で苦杯を喫した。

牧は「（第2ピリオドで）攻撃の流れをつかんだ時に大量得点できず、逆転を許してしまった。4年生を勝たせたかった」と悔しさをにじませた。

得点の好機生かせず

記者の目

更なる一体感を

今大会、筑波大は関東大学リーグ戦以上に気迫と一体感を有し、全5試合を戦い抜いた。だが、これまでの道のりは順風満帆ではなかった。リーグ戦途中までチームを率いていた波多智也（体専4年）が怪我で離脱し、その後も故障者が続出。苦しい状況で、チームを支えているが、試合では牧をまとめたのが3年生の牧隼利（同3年）だった。

全日本大学選手権（インカレ）直前、牧は「点が取れない時間帯に、いかに攻撃を防ぐかが課題。練習における基礎のディフェンスやリバウンドに対しての意識を徹底した」と語った。14日の青山学院大戦では牧を中心に選手が互いに声を掛け合い、気迫ある守備を展開。相手に主導権がある時間帯を耐え抜き勝利した。


攻撃の機会をうかがう牧（昨年12月15日、東海大戦で）

一方、牧は16日の日本大戦ではチームの攻撃をけん引。第2ピリオド、牧は3Pシュートや速攻からのダンクシュートで攻撃の流れを引き寄せると、ほかの選手も続いて得点を決めた。

だが東海大、日本大に敗れ結果は4位。インカレ優勝には届いていない。大会終了後、仲澤翔大（同4年）はインカレ優勝を達成できなかった理由に、牧を支える存在がいないことを挙げる。「練習では自分が牧を支えているが、試合では牧一人が責任を背負っている。試合に出場している選手が牧の支えとなってほしい」と話す。一方、波多は牧について「責任感が強く、一人で気負い過ぎる一面がある。牧が仲間と共に戦うことができれば、どのチームにも勝てる」と述べる。

来年度のインカレは牧ら3年生が主体となる。選手それぞれが責任を分かち合い、より強固な信頼関係を築くことが必要だ。来年度こそ悲願のインカレ優勝へ。筑波大のこれからに目が離せない。

（加藤優花、写真も）

8年ぶり入賞果たす
関東学生新人戦


果敢に攻める星子（右）（昨年11月25日、明治大戦で）＝西村大祐撮影

剣道

【東京武道館（東京都足立区）で西村大祐＝人文学類1年、後藤佳怜＝社会学類1年】関東学生新人戦が昨年11月25日に行われ、筑波大は3位入賞を果たした。同大会での入賞は優勝した2010年以来で、8年ぶり。

筑波大は圧倒的な強さを見せ、準決勝までの4戦を危なげなく勝ち上がった。

準決勝では前回の新人戦で3位の明治大と対戦。先鋒戦は引き分けとなったが、次鋒戦では、近本太郎（体専1年）が相手にコテを取られた後に、メンとドウを取り返し、二本勝ちを決めた。五将戦、森山竜成（同1年）は序盤にコテを取られたが、相手の隙を突きメンを決めた。だが直後に相手からコテを取られ、二本負けとなった。中堅戦、三将戦は引き分けに終わり、続く副将戦では松﨑賢士郎（同2年）がコテを取られ、一本負けを喫した。1―2で筑波大が追い込まれる中、大将戦では星子啓太（同2年）と梶谷彪雅（ひょうが）が対戦。星子は、梶谷の胴が空いた一瞬の隙に引きドウを決め一本先取。その後、星子はコテを決められたが、相手の動きを見極めてメンを決め、勝利した。勝者数と総取得本数が同数となり、勝敗は一本勝負の代表者戦で決することになった。大将戦と同じく星子と梶谷が対戦。互いに一歩も譲らぬ戦いを繰り広げたが、一瞬の隙にコテを取られ敗北。筑波大は惜しくも3位となった。

星子は「筑波大は例年新人戦で力を発揮できていない。今回は入賞できたが、実力は十分に出し切れなかった。弱点を見つめ直し、今後の大会に臨みたい」と語った。

明治大に敗れ3位

スポーツの顔

バレー・女子


インカレで2年連続セッター賞受賞

万代真奈美（体専2年）

セッターとして筑波大女子の攻撃をつかさどる。スパイカー一人ひとりの特徴に合わせ、「打ちやすい」ように上げるトスには定評がある。昨年11月の全日本大学選手権（インカレ）で優勝の立役者となり、2年連続でインカレのセッター賞も受賞。「スパイカーを生かすプレー」を信条に、試合展開を分析してトスを振り分ける筑波大の司令塔だ。

島根県出身。両親の影響を受け、小学3年で競技を始めた。当初は主にスパイカーとしてプレーした。

中学は「日本一」を目指し、強豪・就実中学校・高等学校（岡山県）に進学した。大きな転機が訪れたのは1年時の冬。監督から「セッターをやってみないか」という言葉をかけられた。身長の低さからスパイカーとして伸び悩んでいたこともあり、バレーが更に楽しくなった」。

高校進学後は1年時からレギュラーとして活躍。世代別の代表にも選出され、2015年のU―18世界ユース女子選手権では主将を務めた。当時を「世界の同年代の選手と戦い、大きな刺激を受けた」と振り返る。

だが、3年時にはレギュラーを奪われ、コートに立てない時期も経験。「今までで一番の挫折だった。自分の技術不足を痛感した」。悔しさをバネに練習に励み、トスやレシーブなどの基礎を重点的に強化。全日本高等学校選手権では途中出場を中心にチームを支え、準優勝に貢献した。

高校卒業後は、中高時代から掲げていた「日本一」の目標を達成するため、筑波大へ進学。入学後は自身のプレーの映像や、スパイクの成功率などのデータを用いて綿密な分析を行っている。「映像やデータを使うことで、それまで以上に考えてバレーをすることができるようになった」と成長を語る。筑波大では1年時からレギュラーに抜てきされ、欠かせない存在に。17年のインカレではチームを準優勝に導き、セッター賞に輝いた。

2年時からは、スパイカーを生かす多彩なトスワークに磨きをかけた。東日本大学選手権では激戦を制し、見事優勝に輝いた。だが、秋季関東大学リーグ戦では負け越すなど、チームは不調に陥った。攻撃が上手くかない原因を探る苦悩の日々。セッターがレシーブを行いほかの選手がトスを上げる場面など、常に悪い状況を想定して練習に臨んだ。そして迎えたインカレでは、安定したトス回しでチームの攻撃をけん引。見事優勝を果たし、目標だった「日本一」に輝いた。2年連続のセッター賞にも選ばれた。

4月からはインカレ2連覇をかけた戦いが始まる。現在の課題はレシーブ技術の向上だ。「レシーブはまだまだ苦手。セッターにとって重要な技術なので、もっと伸ばしたい」と強く意気込んだ。

卒業後のプロ入りも視野に入れている。「プロで大学出身の選手として活躍できるように、感覚ではなく頭を使ったプレーを確立したい」と将来を見据えた。（中川遥香＝人文学類1年、写真は本人提供）

多彩なトス回しで攻撃けん引

つくば市 リサイクルセンター4月稼働

プラごみ分別収集に

つくば市は4月1日から、新しいごみ処理施設「リサイクルセンター」（同市水守）の稼働に伴い、新たにプラスチック製容器包装（プラごみ）の分別収集を始める。収集は月2回で、家庭から出るごみが対象。同市はこれまで、プラごみは「燃やせるごみ」として収集してきたが、分別収集でプラごみをリサイクルし、燃やせるごみを減量させたい考え。プラマーク表示のあるものが対象だが、同市の担当者は「分別に迷ったら、従来どおり燃やせるごみとして出してもいい」とも話している。（木村誠、写真も）



4月の稼動開始に向け、工事が進むリサイクルセンター（1月24日、つくば市水守で）

同施設はつくば市が約40億円をかけ建設。粗大ごみや不燃ごみのほか、かんやびん、ペットボトルなどの資源ごみを処理する。新たに収集するプラごみは同施設で圧縮後、樹脂製品の原料などとして再利用される。施設内には市民が利用できる会議室や談話室を設けるほか、収集した粗大ごみのうち、直して使用できる家具などを修繕、市民に提供する「家具類等再生工房」を設ける。

新たに収集の対象となるプラごみは、プラスチック製のレジ袋やビニール製容器、包装が対象だが、汚れていたりプラマーク表示のないものは対象外となる。

筑波大学施設部によると、大学内で排出されるごみは「事業系ごみ」のため、プラごみの分別収集の対象外だという。一方、学生宿舎からのごみは一般家庭と同様の「家庭系ごみ」のため、4月以降は分別回収が始まる。同部は、宿舎を運営する学生生活課と収集場所の確保などについて検討する。

「クリスマスお茶会」
留学生らが茶道体験

留学生に茶道を体験してもらおうと、「クリスマスお茶会」が昨年12月10日、グローバルヴィレッジ内の大和リースコミュニティステーションで開かれ、留学生などが参加した。

会場ではまず、ドイツ出身の留学生が母国のクリスマス文化を紹介。イブ約4週間前から始まる「アドヴェント」というクリスマスの準備期間の様子や、クリスマス当日の過ごし方などが写真を交えて説明された。続いてのお茶会では、筑波大学茶道部和敬清寂社の部員らが茶道の歴史や作法などを解説。参加者は作法を教わりながら、抹茶と和菓子を味わった。参加した留学生は「抹茶は苦かったが、和菓子の甘みが苦さを柔らかくして美味しかった」と話していた。

イベントを企画した生命環境エリア支援室の藤田和子さんは「日本人の学生だけではなく、多くの留学生が参加して文化交流ができ、やりがいがあった。今後も学生とともにお茶会を続けたい」と語った。（佐藤志、12面に関連写真）

サテ室 マナー悪化

利用者「無法地帯と化している」



全学計算機サテライト（1月18日、第二エリアで）＝遠子内早紀撮影

筑波大学内で、学生がパソコンや印刷機などを使える「全学計算機システムサテライト」（サテ室）約20カ所の一部で、端末や液晶ディスプレイ用のコンセントが私的に利用され、抜かれたままになっている事例が頻発し、パソコンの自動更新などに支障をきたしていることが分かった。コンセントの私的利用は過去、利用者の私物のケーブルからぼやが出て以来禁止されている。関係者によるとこのほかにも飲食や私物の放置など、禁止行為が多発してもいる。サテ室の利用状況を調べた。（竹添そら＝知識情報・図書館学類2年）

■春日サテライト

サテ室の端末などを管理する学術情報メディアセンターによると、電源プラグ（プラグ）が抜かれる問題が特に多いのは春日サテライト（春日エリア）の7C102、103号室。担当者によると、プラグ抜きのほか、引き下ろされたディスプレイ下部にキーボードが接触し、キーが押し下がった状態で放置される事例が多発している。これらは、主に私用パソコンを利用後、プラグを抜きっぱなしにしたり、キーボードを動かしたままにすることが原因だ。

同センターによると、これまで「プラグを抜かない」などの張り紙をしたが改善されなかった。このため昨年11月19日、同サテ室を授業などで主に利用する知識情報・図書館学類が、学生にメールを送り注意喚起を行った。

同センターの中井央（ひさし）准教授（図情メ系）は「共用の施設であることを自覚して利用してほしい。違反行為が続くようであれば最悪の場合、（サテ室に設置された）防犯カメラの映像や端末の使用履歴から個人を特定し、個別に対応する必要性も出てくる」と話している。

■飲食・ごみ放置

各サテ室は食べこぼしによる端末などの故障防止のため、室内での飲食が禁止されている。だが全サテ室の担当者に電話取材したところ、サテ室19カ所で日常的に飲食の事例が報告されていた。

特に3Kサテライト（第三エリア）ではミスプリント用のごみ箱に飲食物のごみが捨てられていたり、ガムを机にはり付けるなどの悪質行為が相次ぎ、2年前に室内の全ディスプレイに注意書きをはった。清掃アルバイトの学生や警備員が飲食などを注意をすると「（やっているのは）自分だけではない」と言い返す学生もいるという。

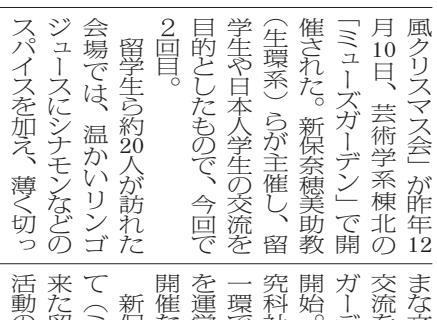
あるサテ室の利用者は「私語や飲食、ごみの放置などマナーの悪い利用者が多くて不快。（一部サテ室は）無法地帯と化している」と話す。

■私物の放置

長期休業中、サテ室内に私物を放置する学生が毎年いる。

医学サテライト（医学エリア）では、忘れ物などは支援室で一括して保管していたが、件数が多くスペースがなくなってきたため、サテ室内での拾得物は、内部にブースを設け、保管している。ある学生は「夏休み中に教科書を数冊置いて帰ったことがある。休み期間であれば授業もなく、利用者も少ないので問題ないだろうと思った」と話した。

留学生と日本人学生交流
ドイツ風クリスマス会開催



ドイツ風のクリスマスを体験するイベント「ドイツ風クリスマス会」が昨年12月10日、芸術学系棟北の「ミューズガーデン」で開催された。新保奈穂美助教（生環系）らが主催し、留学生や日本人学生の交流を目的としたもので、今回で2回目。

留学生ら約20人が訪れた会場では、温かいリンゴジュースにシナモンなどのスパイスを加え、薄く切ったオレンジを浮かべたドイツの家庭料理「キンダープンシュ」などが振舞われた。

ミューズガーデンは芸術専門学群の実習庭園として使われていたが、2016年に新保助教と雨宮護准教授（シス情系）が、さまざまな文化的背景を持つ人の交流を目的に「多文化共生ガーデンプロジェクト」を開始。システム情報工学研究科社会工学専攻の授業の一環で、学生らが家庭菜園を運営したり、イベントの開催などを行っている。

新保助教は「今回、初めて（ミューズガーデンに）来た留学生も多く、今後は活動の幅を広げたい」と話した。

参加したオランダ出身の留学生は「友人の紹介で参加した。（欧州で）キンダープンシュを飲んだことがあり、懐かしくなった」と話した。（越智小夏＝比較文化学類3年）

筑波大学出版会 近刊案内

蟲愛づる人の蟲がたり

筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所　編

生命環境系教授　町田　龍一郎　監修

「蟲愛づる人」たちによる、昆虫愛溢れる約60編の気楽な昆虫話。

20人の研究者たちが、それぞれの視点から昆虫について熱く語ります。

そんじょそこらの名だたる図鑑には載っていない「へえ～そうなんだ～」と思わずつぶやく小話の数々。登場する虫もノミ、ハサミムシ、イシノミなど…ってこんなにマニアックで大丈夫!?本書だけの書き下ろし特典として、生涯を昆虫に捧げた教授による、昆虫のドラマチックな進化のストーリーも収録！楽しめる「昆虫ってなに?」がわかる本。―「菅平生き物通信(69号)平成31年1月14日発行」より―

A5判並製、約156頁。3月6日啓蟄（けいちつ）の日に刊行。1950円＋税。

世界の教室から



ボルドー・モンテーニュ大学（フランス）
毛塚航大

仏から学ぶ古さと新しさ

フランス、と聞けば皆さんは何を思い浮かべるだろうか？美食の国、芸術の国、FIFAワールドカップ優勝国……だが残念ながら僕が皆さんにお話しするのはそのどれでもない。「観光」である。

2016年に過去最高となる観光客数2400万人を達成し浮かれる日本に対しフランスはその数8400万人、実に3・5倍である。長きにわたり観光客数世界1位の座に君臨するフランス。僕はそんなこの世界で一番魅力的だといっても過言ではない国にまったくもって不服ながら日本一魅力がないとされる県、茨城県からやってきた。僕は留学をするからといって別に日本が嫌いというわけではなく、むしろ大好きだ。だからこそ知りたい。「フランスの何がそこまで魅力的なのか」ということを。あわよくば大好きな地元、茨城県の魅力向上に生かせると信じて。

さて、そんなこんなでフランスに来てみた僕だがまず驚いたのはなによりその「古さ」だった。僕がいるのはフランスでも有数の大都市ボルドーという路面電車が走る都会なのだが、中心街に行けば正直コンクリートよりも古き良き石造りの建物のほうが目につく。田舎ならまだわかるが大都市でこれである。古い景観を大事にしている、それだけで個人的にはかなり魅力的ではある…が、待ってほしい。ただ古いだけで天下を取られてはたまったもんじゃない。それに古き良き景観の残る建物や地区なら日本にだってある。と、思っていた僕だがその考えは打ち砕かれる。

別な仏の都市・アヴィニョン、と聞けば受験戦争にもみにもまれた筑波大学生諸君は教皇庁がすぐ思い浮かぶだろう。そこに入るとまず電子パッドを渡される。この教皇庁、肉眼で見る限りただの石でできた部屋があるばかりなのだが、その機器をかざしてみるとなんと昔に栄えていたころのその姿を画面に映し出すのである。なんという魅せ方をしてくれるのだろう。あえてすべてを修復し、過去の形に戻すのではなく、新しい技術であえて「今」のいささかみすぼらしい姿を残しつつ我々に「過去」の姿を見せてくれるのだ。肉眼では擦り切れてもはや見えない壁画も画面ではその続きを拝むことができ、それをやめて己の脳で「いや、あそこは実はもっと違う絵なのかもしれない」と補完しつつ楽しむことも可能だ。

話を景観の話に戻すが、石造りの家とて中身まで昔そのままということはない。その中はしっかりと今を生きる人々の生活空間である。これらのことを知ったとき、僕は理解した。フランスは「古いものの残し方」と「新しいものの使い方」が上手な国なのだと。

日本はどうだろう。全てがそうというわけではないが、大阪城などは中に入ればもはや近代的なコンクリートの建物でがっかりした、なんて声は山ほど聞く。逆に奈良はどうだ、なにも東大寺だけというわけがないだろう、古すぎてすごそうだがなにがなにやらという寺院がいくつも眠っているのではないか。要は魅せ方の問題なのだろう。古いものを大事にしつつ、新しいものをそれに合わせて使うフランス人、そしてそれらがなす街の雰囲気はつい新しいものに飛びつきがちで古いものも残すというより放って、あるいは捨ててしまいがちな日本よりも、言いようもなく「魅力的」だ。（比較文化学類3年、写真は本人提供）

自転車盗難被害減らず

筑波大内 被害台数は3年間で206台

つくば市で、2016年1月～昨年12月末までの3年間の自転車盗難台数が710台から421台と飛躍的に減少する一方、筑波大学内での盗難台数は3年間ほぼ変わらないことが、つくば中央署や学生生活課などへの取材で分かった。大学内で盗難された自転車のうち、半数以上が鍵をかけていなかったという。（森貴遼太）

同課によると、3年間の筑波大の自転車の盗難台数は、昨年74台、17年63台、16年69台の計206台で、この3年間に盗まれた自転車206台のうち、無施錠の自転車は119台。一方、学内の地区別での3年間の被害は、第一エリアが36台と最多で、次いで春日エリア29台、第三エリア27台、体芸エリア26台、平砂学生宿舎周辺26台だった。

同課によると昨年の10月には、同課に盗難届けが出されていた自転車を乗り回していた学生が学内で発見されたが、その学生は「自転車は学内に放置されていた」という内容の話をしていたという。

同署は「筑波大では鍵をかけずに置いてある自転車を少しの距離だけ乗った後に、乗り捨てる事件も起きている。これは占有離脱物横領罪という立派な犯罪だ」と話している。また学生生活課の担当者は「二つの鍵を使う二重ロックなどで盗難の予防に努めてほしい」と話した。

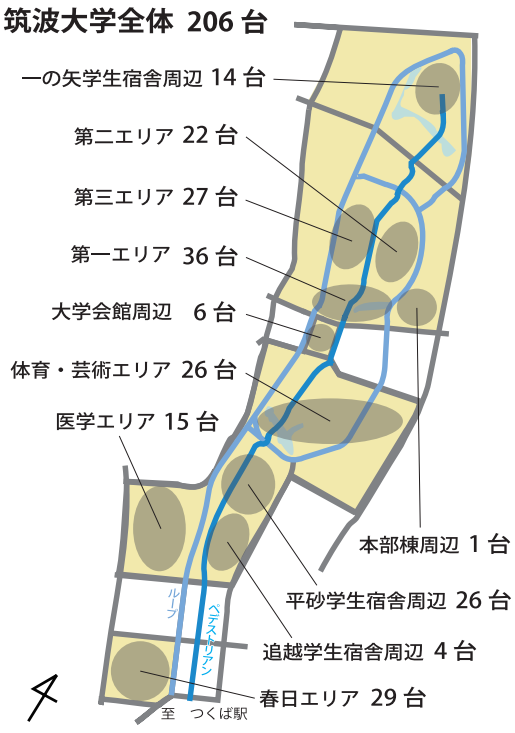
昨年は17、16年に比べ微増だった。一方で同署によると、同市内での自転車盗難台数はこの3年間、16年が710台と最多で、次いで17年522台、18年421台と年々減少していた。

同課によると、筑波大では金保安則副学長（産学連携担当）と愛称を考案した徳武雅也さん（社工専攻1年）が除幕を行った。

筑波大は、カスミ筑波大学店とサザコーヒー筑波大学アリアンサ店がオープンした昨年10月1日から、学生や教職員、関係者を対象に愛称を公募した。同月31日までに83件の応募があり、審査の結果、徳武さんの応募作「SAKURA TERRASSE」に決定した。徳武さんによると、名前の理由として、同所が桜並木に囲まれていることや、筑波大が旧新治郡桜村に位置したことなどを挙げている。

徳武さんは「利用者に定着する名前になるとうれしい」と話した。

佳作には紀村修一さん（スクール1年）の「つくばオアシス」、劉知優（りゅうちゆう）さん（社工3年）の「Siesta」（シエスタ）が選ばれた。（木村誠、写真も）



学内の地区別自転車盗難被害台数

（筑波大学調べ、2016年1月～昨年12月）

つくば市内では激減

ショッピングプラザ

愛称は「サクラテラス」

看板の除幕式を開催



除幕する徳武さん（右）と金保副学長（1月16日、筑波大学ショッピングプラザで）

平砂学生宿舎北の筑波大学ショッピングプラザの愛称が「SAKURA TERRASSE」（サクラテラス）に決定し、同所で16日、看板の除幕式などが行われた。看板は原忠信准教授（芸術系）研究室の王旭驊（おうきょくか）さんがデザイン。式で



交通安全の大切さ学ぶ

蹴球部共催 小学生183人が参加

小学生の交通事故を防ごうと、筑波大学蹴球部と同部スポンサーのトヨタカローラ南茨城（つくば市西郷）は昨年12月9日、「体験型交通安全教室」を筑波大学多目的グラウンドで開催し、つくば少年少女サッカー連盟に所属する小学3年生以下の児童183人が参加した。同部は地域貢献を目的に、つくば市内の少年サッカーチームに部員をコーチとして派遣しているが、地域貢献の一環としての交通教室の開催は初めて。

会場には自動車と小学生に見立てたコーンを使い、「死角」を知るコーナーを設置。参加者は実際に運転席に座り、車の周りに置かれたコーンが見えないことを体感していた。また反射板の製作コーナーも設けられ、参加者は反射板に丸やハート形など思い思いの形の反射シールを貼って、反射板を作成。参加した小学生は「楽しかった。（反射板はリュックに付けたい」と話していた。

トヨタカローラ南茨城の木村政勝さんは「蹴球部部員の協力で教室を開くことができた。蹴球部とのつながりを深める良い機会となった」と話した。また、同教室の責任者を務めた佐藤航さん（体専3年）は「交通安全の大切さを伝えつつ、子どもたちと交流を深めることができた。今後も地域の方々と連携してイベントを行いたい」と語った。（加藤優花、写真も）


運転席に座り、「死角」を体感するコーナー（昨年12月9日、多目的グラウンドで）

あの人に聞く tanbō

麻雀同好会

運を味方に全国制覇

「ロン！」という声を上げ一人の部員が自慢げに手の内を明かす。ほかの部員らの落胆する声と共にガラガラと牌を中央に集める音が響く。

昨年11月、全国の学生の頂点を決める「学生麻雀甲子園」（学生麻雀連盟主催）で、団体優勝を果たした。

麻雀は中国で始まったテーブルゲーム。雀卓を4人で囲んで行う。牌を使い、役と呼ばれる決まった組み合わせを作ることで得点でき、役ができるとや「ツモ」という掛け声でそれを周知する。ゲーム終了時に得点が高い人の勝利となる。現在は競技としても全国で取り組まれている。増川柾樹（まさき）さん（生物3年）は「麻雀は結果が運に左右されるゲーム。初心者でも経験者と同等に戦うことができるのが魅力」と話す。

毎週金曜日の放課後、5C棟に集まり麻雀を打っている。そのほか学内大会を開催したり、学外で催される大会へも参加する。部員は現在71人、ほとんどが大学から麻雀を始めた初心者。創立3年の新しい団体だ。

同会は当時1年生だった代表の古舘摩輝士（まきし）さん（応理3年）が設立した。古舘さんが本格的に麻雀を始めたのは、高校生が麻雀に打ち込む姿を描いた漫画『咲-Saki-』（スクウェア・エニックス）を読んだことがきっかけ。麻雀仲間を集めたいと考え同会設立に至った。

優勝を果たした学生麻雀甲子園は4人1組のチーム戦で行われる。決勝は先鋒・次鋒・副将・大将戦を行い、合計得点が高いチームが優勝となる。今年は全国から500人以上が参加する中、同会は地方予選と本戦準決勝を1位通過。決勝も副将戦まで1位を維持していた。大将戦の途中、一度は逆転を許すも最後は1位を奪還し優勝を決めた。予選から1位を守り抜いた完全優勝だった。2017年は全国5位という結果に終わっており、敗戦を経ての初優勝に喜びはひとしお。古舘さんは「仲間が良い流れを作ってくれた中、一度逆転された時には焦りを感じた。優勝できたのはツキがあったからだと思う」と決勝を振り返る。

部員らは楽しそうに今日も雀卓を囲む。創立3年で全国を制した彼らの勢いは止まらない。（柏このか＝比較文化学類2年、写真も）


雀卓を囲み競技を行う会員たち（昨年12月23日、つくば市天久保で）

催事 播種（はしゅ）

2月26日（火）―3月3日（日）に筑波大学芸術専門学群書専攻の有志展「播種」がつくば市民ギャラリー（つくば市吾妻）で開かれる。

開催時間は午前9時から午後5時までで、初日は午後1時開館、最終日は午後3時で閉館。入場は無料。

問い合わせ＝haru-kenjiro-10.02@ezweb.ne.jp

なないろスポーツフェスタ2019

3月17日（日）に「なないろスポーツフェスタ2019」が洞峰公園（つくば市二の宮）で開催される。

同イベントは筑波大学が主催し、スポーツの価値を感じ、相互理解を深める「スポーツと教育のイベント」。子どもから大人まで楽しめるイベントを用意している。

開催時間は午前9時から午後5時30分までで、受付は午前7時30分から始まる。参加費はプログラムに応じて500円から。

種目・対象＝なないろ駅伝：中学生以上、リレーマラソン（4時間耐久）：中学生以上、ファミリーラン：小学生の親子、教育プログラム：小学生

申込方法＝2月18日までにホームページから。

問い合わせ＝nanairo@nanairo-festa.world

Who's Who?

第13代つくば観光大使に就任

山崎 麻亜紗（まあしゃ） さん（社学2年）



振り袖を着てつくば市のPR活動を行う山崎さん＝本人提供

イベントやメディアを通してつくば市をPRする「つくば観光大使」の13代目に、昨年9月就任した。大学では放送サークル「THK筑波放送協会」に所属し、市のケーブルテレビに出演。そこで鍛えた流ちょうで明るい話しぶりを生かし、全国放送のラジオやイベントなどでつくば市の魅力を紹介している。

大使としての仕事は多岐にわたる。つくば市などが主催する市の特産物をPRするイベントなどで挨拶を行ったり、来場客にパンフレットを配ることもあれば、モデルとして地域情報誌の撮影をすることもある。普段の学生生活に加えて、週末に大使の活動が入る時は多忙だが、楽しみながらこなしている。

魅力を「伝える」大使の活動の原点は、高校生時代の留学にある。中学生の時にアメリカや中国からの帰国子女の友人と交流した。海外に興味を持ち、高校生の時にニュージーランドへ3年間留学。異国の地で日本の文化を紹介する機会があり、文化を伝えることに興味を抱いた。

千葉県出身。つくば市に来てからは、「THK筑波放送協会」に入り、その友人と市内を巡った。そこで知ったのはラーメンの味。つくば観光コンベンション協会によると、市内には約100軒のラーメン専門店があるといい、スープや麺の種類が豊富だった。以前はラーメンを食べることは少なかったが、つくば市で初めて食べた鶏白湯のラーメンなどに魅了された。

市内を巡り知った魅力
SNSなどで発信

これ以外にもつくば市にはさまざまな魅力があった。筑波山に初めて登った時は、日没後に山頂からの夜景を堪能。登山の楽しさも感じた。

つくば市の魅力に次第に惹きこまれる中、ある日ショッピングモールを歩いていたところ、つくば観光大使の募集ポスターを発見。市の魅力を多くの人に発信したいと思い、応募を決めた。

書類選考と面接を経て、ほかの2人の女性と共に大使に就任。大使の任期は2年で、前年から務める3人と合わせて6人で活動を始めた。

大使になって以降、特産物や自然の美しさなど市の魅力を再確認する機会が増え「もっと多くの人につくば市を訪れてほしい」という思いが強まった。市の魅力を更に発信するために、大使就任時から、写真や動画を投稿するSNS「インスタグラム」を駆使。市内で評判のカフェの写真や、大使として参加したイベントの写真などを投稿している。投稿に寄せられるコメントが活動の原動力になっている。

昨年11月の「第38回つくばマラソン」では、走路近くから声援を送る役目を担い、そこから撮影した写真を投稿した。「特別な景色」を、多くの人と共有することが大使のやりがいの一つだ。

今後は茨城県の観光地やグルメなどの知識を問う「いばらき観光マイスター認定試験」の受験を通じて、つくば市や茨城県を更に知りたいという。

◆

「影響力のある人になりたい」活動を機に、多くの人につくば市を訪れてもらうことを目指す。SNSをはじめ、さまざまな方法を開拓しながら、つくば市の魅力を伝え続けていく。

（國井俊介＝社会学類1年）

編集後記

米国西部の「ベル」という町をご存じですか。町では1998年ごろ、経営不振で地域紙が休刊。その十数年後には市の幹部が過去の12倍、6400万円の年俸を得ていたことが、偶然その町を訪れた大手紙の記者によって明らかになりました。新聞記者の監視の目が働かなくなったためといわれています（2011年10月29日付朝日新聞朝刊より）▼ニュース媒体が紙からウェブに変わる中で、日本の新聞発行部数は激減。中には廃刊に追い込まれる新聞もあり、日本で「ベル」と同じことが起きてもおかしくない状況だといえます。地域に密着した地域紙の役割の大切さを実感しました▼今号では、筑波大学でのセクハラについてアンケート調査し、その結果を報じました（1、6、7面）。また、筑波大学内の体育施設で現金などの盗難が続くこと（1面）や、つくば市関連では、新たなごみの分別収集（10面）、また、自転車盗難の被害（11面）などを報じました▼3年生が引退し1、2年生主体の編集部になりました。今後も本紙は地域紙の役割を果たすことも目指し、報道を続けます。（編集長・木村誠＝人文学類2年）

次号は
4月8日（月）
発行予定です

編集・発行

■筑波大学新聞編集委員会
▽委員長＝土井隆義（人文社会系・教授＝社会学）▽副委員長＝土子昇（学生部学生支援業務推進担当課長）▽編集委員＝萱谷純子（生命環境系・教授＝果樹園芸学）、竹中佳彦（人文社会系・教授＝政治学）

◆

■筑波大学新聞編集部
▽編集代表＝福原直樹（筑波大学・教授＝ジャーナリズム論）▽編集長＝木村誠（人文学類2年）▽副編集長＝飯田健介（社会学類2年）、森賀遼太（同2年）ほか編集部員17人

◆

発行＝筑波大学

◆

印刷＝ヒラマ写真製版

学内総合

占春園再生プロジェクト



池の水を抜いて捕獲した魚を見る参加者（1月13日、東京都文京区で）＝越智小夏撮影

2面へ

学芸

星空コンサート



筑波大生が制作した映像を背景に演奏する奏者（昨年12月15日、つくばエキスポセンターで）＝村上史明助教提供

5面へ

スポーツ

全日本インカレ



ブロックで相手の攻撃を防ぐ丸尾（右）と万代（昨年12月2日、大田区総合体育館で）＝飯田健介撮影

8面へ

学生生活

クリスマスお茶会



茶道の作法を学ぶ留学生（昨年12月10日、グローバルヴィレッジで）＝佟其志撮影

10面へ